ディバインナイツ　～星語りの物語～

イーヴァルディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディバインナイツ　～星語りの物語～

【Ｎコード】
Ｎ２５８１Ｔ

【作者名】
イーヴァルディ

【あらすじ】
世界には理不尽が多い。その理不尽を戦うために彼らは剣を取る。世界の真理を彼が知るその日まで。

ディバインナイツ　－ｔｈｅ　ｏｒｉｇｉｎ－とは時代が違います。こちらも新たな未来を求めてを優先して書くので長期休載があるかもしれません。現時点ではまだまだありませんが。

プロローグ（前書き）

新たな未来を求めてがスランプ中なので気分転換をかねて書いていきます。
主人公最弱には理由があって、三話目にて明かします。

プロローグ

最初に科学の時代があった。

科学の進歩によって世界は発展したが争いがなくなることはなかった。そして、その争いがいつしか大きなものとなり科学の時代は滅んだ。

続いて魔科学の時代があった。

科学の時代以上に発展した文化を持ちながらも、外敵の侵攻によって滅んだ。ただ、科学の時代と違い、数人による英雄部隊が結成された。

その名もディバインナイツ。リーダーが神のごとき強さを誇ることから名づけられた部隊は世界の崩壊を救った。

そして、神威の時代があった。

人が神によって制御され神によって遊ばれていた時代。最終的には神に反逆した人によって滅んだ。

神が滅んだ後の世界は神剣の時代だった。

神の力によって作られた武器である神剣を使い人は争った。文明レベルすら維持できないほどに。

そして、今の時代。名はまだない。だが、その世界は滅びに瀕していた。

今までとは戦争でも、外敵でもない。新たな敵によって。

星語りの物語

それは世界の命運をかけた三人の少年とその仲間達による物語である。

序話　失意の少女（前書き）

まずは序話から。ちなみに、主人公は次の話から出ます。

序話　失意の少女

失った。たくさんの大切なものを失った。

私は自分の手から愛刀をその場に落とす。降り注ぐ激しい雨の影響で地面に愛刀が転がった音はしなかった。でも、周囲にいる人は警戒している。

姿から判断して山賊だろう。呑気なものだ。世界は滅ぶか滅ばないかという瀬戸際だと言うのに、彼らは呑気に山賊をしている。

一体、私のしていたことはなんだったのだろう。

私の頬を温かい何かが濡らした。涙だ。いつの間にか私の瞳から涙が流れている。

「おい、誰だ？」

山賊の一人が警戒をしながら私に声をかけてくる。でも、私は答えない。いや、答えられない。

もし、この状況で口を開こうものなら出てくるのは情けないほど泣いた声だろう。そんな状況にするわけにはいかないのだから。

私は愛刀を拾い上げた。土で汚れたそれを横に一降りすれば全ての泥が落ちる。私はそれを鞘に収めた。

「誰だって聞いているんだよ！」

「黙れ、下郎」

私の口から出てきた言葉は恐ろしいくらいまでに冷めた声だった。ほんの前まで死闘を繰り広げていたからか、それとも、

「ここで死にたいバカな人は向かってくればいい。私は、全てを壊すから」

「て、てめえ！」

山賊の一人が走る。その速度はまるで牛の様に遅かった。私は愛刀の柄に手を乗せる。

「私は」

鞘から刀を走らせた瞬間、周囲の天気が変わった。雨から雪へ、そして、雹へ。

向かってきた山賊の血でぬれた愛刀を一降りして血を飛ばす。私の体に雹が当たり、体中に微かな傷を作っていく。

「逃がさない」

この日、季節外れの雹が観測された山中ではこの地域一体の最大の山賊勢力が氷漬けにされて見つかったらしい。

第一話　冒険者の少年少女（前書き）

主人公が登場です。後、後書きでプロフィールを書いていきます。

第一話　冒険者の少年少女

町の酒場は独特だ。酒場というより情報屋と言っていいのかもしれない。街の酒場には重要な情報が集まりやすいのは今では常識だ。最初の頃はそれを知らず探すのが大変だったけど。

「いらっしゃい」

だけど、ここの酒場はまだ昼に近い時間だから人がほとんどいなかった。マスターの声に軽く会釈してオレはカウンター席に座る。

「飲み物はなんにします？」

「ミルクでお願い。もうすぐ来る連れの方がお酒を頼むから」

「わかりました。それにしても、見ない顔ですね。冒険者ですか？」

「まあね。まだ初めて半年の新人だけど」

出されたミルクを口に含む。人工的に作られたミルクだけど味は悪くない。もしろ、人工ミルクの中じゃかなり高品質なものだ。

「マスター、ココロダ山の話を聞いていいかな？」

ココロダ山は今滞在している町のすぐ南の方角にある大きな山だ。二ヶ月ほど前までは大きな山賊弾が縄張りにしており、何度も王国の討伐隊が出たが何度も返り討ちにあったとされる山。

ここを要塞にすれば攻めにくい地形なのだろう。

「もしかして、あそこに行く気ですかい？」

「まあね。依頼を受けたから」

そう言ってオレは依頼の表をマスターに渡した。

これは冒険者ギルドが発行するクエスト受諾表だ。そこに書かれたクエストをしっかりこなせば報酬がもらえる。国もバックについているため上級者の冒険者は引退してからかなり裕福に暮らしているらしい。

「ココロダ山の調査。３００万エルト？　確かにあの山に入ったものは未だに生きて帰った者はいませんが」

「やっぱりなんだ」

二か月前に山賊団が全滅してからあの山に入ったものは誰も帰ってきていない。冒険者も、傭兵も、軍隊も、民間人も、誰も帰ってきていない。

だから、３００万エルトなのだろう。二年間ほど遊んで暮らせる大金を報酬にしている。

すると、酒場のドアが開いた。オレとマスターがそちらを振り向き、マスターの顔が固まる。

そこにいたのは波打った金髪の少女だ。背の高さは１４０ｃｍほどでかなり小柄だが、その背中には１６０ｃｍほどの杖が背負われており、服装は冒険者御用達のジャケットとズボン。そして、身につ

けている軽装甲には一つのエンブレムがある。
二本の剣を交差してその背景に翼を広げた鷹がいる。
「クリス、遅かったね」
「すみません。お父様の使いの方とお話していたので。あっ、お酒、アルコールが弱めでマスターのおススメをください」
「は、はい。かしこまりました」
「硬くならないでください。今の私は冒険者ですから」
マスターがカチコチになりながらカクテルを作ろうとする。その様子を見ながらオレは小さくため息をついた。
「クリス、それは無理だって」
「ですよね」
クリスはしょぼんと視線を下げた。オレはミルクの入ったコップを持ち上げる。
「どんな話だったの？」
「いつもの話です。元気にしているのかとか、お金は大丈夫かとか」
「いつも通りだね」
クリスの父親は親バカと誰もが言うくらいに親バカだ。でも、自分

のやることを全く見失わずに親バカをやるのだからその姿勢は誰もが尊敬している。

オレだってああいう親になれたらいいけどね。

「レイは何か情報が聞けました？」

「やっぱり、噂は本当みたい。どうする？　オレ一人で行こうか？」

「レイ一人で行けば行方不明者の仲間入りです。私も行きます。リスクを承知で依頼を出しましたから」

オレが受けたクエスト。その依頼を出したのはクリスだ。

ココロダ山の調査を行うと書いてあるが、正確にはクリスと一緒に調査を行うということになる。だから、大人数ではなくソロで冒険者をやっている人。なおかつ、下心なくクリスと接することが出来る人。そして、年齢の近い人物。

その全てに合致したオレがクリスと一緒に言うことになった。

「カクテルでございます」

マスターがクリスにカクテルを渡す。クリスはそれを受け取って口に含んだ。

「あっ、おいしい」

「ありがとうございます、姫様」

「本当においしいです。レイ、調査が終わったらまた来ませんか？」
マスターが呼んだ、姫様という言葉。クリスの本名はクリスティナ・アピニオン。二本の剣と背景の鷹が印象的なアピニオン王家の第三王女だ。王位継承権は大体１２番目くらいだからこういうことが許されている。
オレは頷いた。
「そうだね。マスター、他にココロダ山の情報はない？」
「地図なら。それ以上のものはさすがに集まりません。帰って来た人がいないので」
そう言うとマスターは地図を渡してきた。オレはそれを受け取ってクリスと一緒に見る。
深い渓谷やら高低差の大きな場所など、一目見るだけでココロダ山がどれだけ動きにくい地形かわかる。でも、一か所だけ存在する空白の場所。
「ここはなんでしょうか？」
「多分、山賊の本拠地付近じゃないかな？　山賊が近くにいたから調べることが出来なかった。今では誰も帰らないから空白」
「確かにそう考えれば納得できますね。でも、どうやって行きます？　真正面からでは危険性が高いと思うので」
「そうだね」

オレは地図の全体を見た。一番簡単なルートは山の中にある道うを使っていけばいいけど、それ使えば行方不明になるのは確実だろう。だったら、別のルートで行かないと。

「このルートかな」

オレが指さしたのは渓谷だった。

「このまま川をさかのぼり上流に行く。そうすれば何か分かるかもしれない」

「レイ、ここは歩けるような場所じゃないと思うんですけど」

地図上の表記だと確かに歩くような場所じゃない。でも、オレは笑った。

「オレ達は冒険者だぜ」

第一話　冒険者の少年少女（後書き）

主人公
レイ・ラクナール　１７歳
身長１７０ｃｍ　体重５９ｋｇ
武器：片手剣
ポジション無し
得意魔法属性無し

第二話　眠り姫

ココロダ山にある渓谷。そこは断崖絶壁で囲まれており、そこを歩くことは無理に等しい。でも、オレ達はそこを歩く。

ロッククライミングしながら。

「レイ、帰ったら怒りますからね」

「大丈夫だって。ここを通っていたら見つからないから」

「絶対に見つかりませんけどね！」

クリスが震える手で岩肌を掴み、少しだけ出ているでっぱりに足を乗せて少しずつ進んでいく。

オレは岩肌を蹴った目星をつけていた足場に乗り移った。クリスもすぐに乗り移ってくる。

「ここは」

「昔に使われていたと思う天然の道。多分、崖崩れでもあったんじゃないかな」

地図を見ていたら気付いたけど、断崖絶壁の途中から道があった。そこまでたどり着けば目的の場所まで結構早く着くことが出来る。でも、足場はかなり不安定だ。

オレはクリスの手を握って歩き出す。

「私が前に出ましょうか？　もし、敵が出てきたなら」

「大丈夫だから。それに、こんなところで戦闘になったら落とした方が早いよ」

「そうですね」

こういう道幅せまい場合は剣を振り回すことは難しい。だから、こういう特はルールなしのストリートファイトみたいな感じで行けば十分だ。

それでも、危険なことには変わりないけど。

「さてと」

オレは前を見る。どうやらこの天然の道も終わりみたいだ。それに、そろそろ中央に近づいているから上っておかないと見失う可能性もある。

「ここを上るよ」

「ここを、ですか？」

クリスが見上げたのは断崖絶壁。もちろん、ロッククライミング命綱無しバージョンだ。落ちれば確実に死ぬ。オレは確実に。

そんな場所を見上げながらクリスが少し遠い目をして語りかけてくる。

「浮遊魔法を使っていいですか？」

「クリスは浮遊魔法でいいよ。オレは上るから」

そう言うとオレはすぐに岩肌に手をかけた。そして、器用に登っていく。冒険者だからということもあるけど、オレ自身がロッククライミングが大好きで昔住んでいた場所だとよく崖登りをしたからだ。

セリアとガウスは無事かな？

でっぱりを上手く掴み、体を上げてでっぱりに足を乗せる。どれくらいしたかわからないが、気づけば崖を登り切っていた。渾身の力で体を上げて周囲を見渡す。

周囲にあったのは信じられない光景だった。氷の彫像となった木々。木々だけじゃない。人もいる。服装から考えて冒険者だ。

「どうかしました？　えっ？」

オレの後を追ってクリスが昇ってくる。杖の上に腰かけて。そして、目の前の光景を見て完全に固まっていた。

オレは氷の彫像に近づき、凍った木々に手を触れる。そして、眉をひそめた。

「冷たくない？」

そう言えば、寒くもない。こんなに氷が存在するなら周囲一帯がかなり寒くても違和感がないはずなのに。でも、今の気温は他の場所と全く変わらない。

触っても冷たくないということは、温度自体が動いていないということだろう。

「氷属性の魔法かな。でも、ここまで大規模に魔法を展開できるのは神剣じゃないと無理だと思うけど」

「レイ、これは、一体何なのですか？」

クリスも不思議に思っているみたいだが、怖がって氷の彫像に触らない。でも、今回はそれがいいともう。きっと、この木々は完全に罠だから。

オレは木から手を離す。そして、少々赤くなった掌を見ながら小さく息を吐いた。

どうやら、ココロダ山に入ってから誰も帰ってこないのはこれが原因らしい。魔法の術式の根源さえ分かれば十分だけど、それをどこにあるか探さないと。

「クリス、氷には絶対に触れないでね。確実に呑みこまれるから」

「もしかして、水と炎と氷の魔法合成ですか？」

「多分ね」

そんな高性能な魔法を相手が使える以上、こっちが下手に手を出せばどうなるかわからない。だから、警戒しながら行かないと。

オレは腰から剣を抜いた。安物の片手剣だ。初心者の冒険者が身に

つけるアイテム。ちあみに、冒険者養成学校の卒業時にもらったものをずっと使っている。

クリスが背後で杖を背中に収めたのがわかった。こういう状況で魔法を放てばむしろ気づかれる可能性があるから妥当な判断だ。

歩く。オレは周囲の木々に触れながら、微かに方向を読み取りつつ。歩く。クリスは周囲の氷に触れないようにしながら。

そして、木々が開けた。そこに広がっていたのは一面の花園。ただし、氷の彫像だ。

「うわっ、綺麗」

クリスが小さくつぶやいた。感嘆の声の意味がわかる。確かにこれは綺麗だ。綺麗だけど、これに触れたならオレ以外は凍るだろう。こういう時だけ自分の能力に感謝だ。

よく見渡してみると花園の中央に何かが突き刺さっている。細い剣の様なものだ。レイピアとは少し違うような。

「クリスは待機していて。オレが向かうから」

「はい。気を付けてください」

オレはクリスに頷いて氷の花園に足を踏み入れた。それと同時に服越しに嫌な感覚が襲う。氷の花に触れた場所が凍っているのだ。その凍った場所が冷気を伴ってオレの足に当たっている。

オレは小さく息を吐いた。そこまで冷たくはないが、長居するのは

危険だろう。

氷の花をかき分けて前に進む。幻想的な光景なのだが、実際の効果を知っているならそれは全く幻想的じゃない。一体、何があるんだ。

そして、オレは中央にたどり着いた。ズボンの半分くらいは氷に浸食されているが動き回っていたら壊れるだろう。でも、それよりも大事なことが目の前にあった。目の前にあるのは一本の刀。確か、東方の騎士が使う切れ味抜群の武器だ。それが地面に突き刺さっている。そして、

地面に横たわる少女。

少し年上なのかもしれない。微かに青みがかった白い髪に可愛らしい顔。クリスと比べてもいい勝負だろう。その少女が横たわっている。

身につけている服装は甲冑。鈍い光を放つ甲冑だ。新品とは違い使いこなれた感じがする。その甲冑の上でまるで祈るように手を組んでいる。

オレはその少女に手を伸ばしていた。どうしてかわからない。でも、伸ばさなければならないような気がしたから。

少女はどうやら眠っているらしく、まるで眠り姫とも言わんばかりの状況だった。

オレの手が少女の頬に触れる。それと同時に何かが砕ける音が鳴り響いた。まるで、結界を破壊した時と同じような音が。

少女の目が開くと同時に少女が起き上がった。刀を手に取りその刀をオレに向かって振ってくる。

殺される。

そう思った時にはオレは後ろに跳んでいた。でも、手に持つ剣が刀に捉えられスパッと切断された。

地面に着地すると同時に刀が首筋に当てられる。

「あなた、何者？　そうして、私の固定結界を破壊して安眠を破るの？」

第二話　眠り姫（後書き）

クリスティナ・アピニオン　１６歳
身長１３９ｃｍ　体重？？ｋｇ
武器：杖
ポジション：センター
得意魔法属性：全部

第三話　人類最弱男（前書き）

レイが最弱に対して刀を持つ少女はかなり強い設定です。最弱と最強の対比を書きたかったのと、その最弱視点からの物語を書きたかったからです。そげぶの人のような強力な能力なんてない文字通り最弱ですよ。

第三話　人類最弱男

その言葉にオレは答えることを忘れていた。少女の声は何故か心地よささえ感じていた。刀さえ当てられていなければもっと良かっただろう。

半年間連れ添っていた愛剣は使いものにならない。

「君は？」

思わずそう言ってしまい刀が首筋を微かに斬るのがわかった。本当に微かなのでチクッとしたぐらいで気にはならないが。

すると、少女が微かに眉をひそめた。

もしかして、何か作用させるつもりだったのかな？

「聞いているのは私。あなたは何者？」

「オレはレイ・ラクナール。冒険者だ。クエストのためにこの山の調査に来た」

「そう」

少女が刀を引く。そして、刀を鞘に収めた。

「なら、今すぐ去りなさい。これ以上ここにいるなら」

「残念だが、ここから帰らせねえよ」

急に響き渡った男の声にオレは振り返った。そこには首筋に剣を当てられたクリスの姿。その後ろには顔に大きな傷痕を持つ男がいる。

クリスが油断している最中に近づかれたか。

「ようやく見つけたぜ。親分達を殺したガキが。こいつは王家の者だから使い道はあるが、お前らはない。だから、この場で死んでもらうぜ」

周囲を見渡せばいつの間にか囲まれている。ただし、ほとんどがオレとあまり変わらない年のようだ。これなら少しは勝ち目がある。

オレは使いものにならない剣を構えた。

「オレはクリスを助ける。だから、君は逃げろ」

「はあ。あなた、自分の力がわかっていないの？」

「わかっているさ」

オレは地面を蹴る。全速力で蹴ってクリスを助ける。

「バカが。やれ」

その声が聞こえた瞬間、オレの体は地面に叩きつけられていた。肺の中にある空気が全て吐き出される。

地面に叩きつけられたオレの背中に誰かが乗ったのか痛いほどの重みも感じる。

「なんだこいつ？　今ので反応出来ないのかよ」

多分、背中に乗っているのは戦闘をほとんど体験したことのない人だろう。クリスならどうにかするかもしれないけど、オレは絶対に無理。

相手が身体強化魔法が使える時点で勝ち目はない。

「弱いってレベルじゃないだろ。冒険者のくせに」

確かに冒険者の中じゃ冗談抜きで最下位だけどな。だけど、これでも冒険者なんだから意地ぐらいは、

「起きるな」

頭が勢いよく踏まれる。頑丈さが取り柄のオレじゃなかったら確実に死んでいたような力。

「へぇ、これでも死なないのかよ。だったら」

剣を抜く音。多分、このまま剣を振り下ろされて終わるんだろうな。

「はぁ。あなた、本当に弱いのね」

その瞬間、背中に乗っていた重さが消えた。オレはすぐに起き上がり周囲を見渡すと、氷の花園の中に氷漬けにされた人がいる。

まるで、来る途中で見たのと同じ姿。

「今の速度は止まって見えるほどよ。まあ、あなたなら納得だけど」
そう言いながら少女が刀を構える。
「手伝ってあげる。あなたに聞きたいことがあるから」
「身体強化系を普通に使える人がいるなら大いに助かる。今は」
オレは地面を蹴った。向かうのはクリスがいる方向。
「クリスを助ける！」
「わかったわ」
その声が聞こえた瞬間、少女の姿はクリスを捕まえている男の横にいた。男の顔が驚愕に染まるのと同時にこめかみに柄がめり込み男が吹き飛ぶ。
吹き飛ぶと同時にクリスの体は少女の腕の中だった。
「大丈夫？」
「あ、はい。ありがとうございます」
「よくもゴルメさんを！」
近くにいた周囲で一番若い、１２歳くらいだろうか、少年が剣を振り上げる。オレはすぐさま間に入り込んで剣を受け止めたつもりだった。

断ち切られた剣が手から叩き落とされる。そして、翻された剣先が鎧だけを半ばまで斬っていた。

これが身体強化をしたのとしていないのとの差か。

「レイ！」

クリスが杖を構えた瞬間、圧縮された空気の塊が少年を吹き飛ばしていた。

オレは一歩後ろに下がる。

「無事ですか？」

「だ、大丈夫だよ。クリスこそ無事？」

「私は大丈夫です。レイは最弱なのですから無理はしないでください」

心配してくれるのはありがたいのだけど、最弱と言われる度に胸に何かが突き刺さるのは気のせいだろうか。いや、気のせいであって欲しい。

最弱なんてとうの昔に受け入れたのだから。

「お願いですから。お願いです」

クリスの可愛いらしい瞳からはいつの間にか涙が落ちていた。オレは一瞬だけ目を伏せて、そして、クリスの頭を撫でた。

「大丈夫だよ。オレは昔から頑丈だから。クリス。今は周囲の敵を」

「それなら心配には及ばないわ」

周囲を見渡して初めて気づく。周囲にいたはずの男達が全員氷漬けにされているのを。

クリスが息を呑んだのがわかった。オレはクリスを背中にやる。

「君は、何者だ？」

「そうね。その前に」

少女が刀を振る。反応することは出来なかった。首筋に刀身が食い込んで血が流れるのがわかる。

「レイ！」

クリスの叫びと共に少女が刀を引いた。

「やはりね」

「どういうつもりですか！？」

クリスがオレの前に杖を構えながら立つ。そんなクリスを少女は冷めた目で見ていた。

首筋に手を当てると傷口はそれほど酷くはないが、血がかなり流れている。そして、傷口の近くが微かにヒリヒリする。もしかして、

「オレを試したのか？」

「ええ、そうよ」

少女が刀を鞘に収めた。

「私の名前はフィーナ・ベルフォルト。あなたに尋ねるわ、世界最弱の人間」

やはり、最弱と言われる度に何かが突き刺さる。確かにオレは最弱だけどさ。

「一般人より弱いあなたはどうして戦うの？」

「レイがどうして一般人より弱いと決めつけるのですか？」

クリスがいつでも魔法を唱えられるようにしながら少女、フィーナに尋ねる。フィーナは微かに笑った。

「あなたには質問していないわ」

その瞬間、クリスの持つ杖が半ばから切断されていた。クリスが一歩後ろに下がる。

もしかしたら、クリスですら刀の軌道が見えてなかったのかもしれない。オレは全く見えなかったけど。

「次に口を開けば氷の彫像にしてあげる。大丈夫よ。痛みは一瞬だから」

クリスの首筋にいつの間にか抜かれていた刀が当てられていた。
オレはその刀を掴む。
「クリスには手を出すな。フィーナと話しているのはオレだろ？」
指はむちゃくちゃ痛い。むちゃくちゃ痛いけど、こうでもしなければ何かした時にクリスが死ぬ。そんなことなんて絶対に嫌だ。
だから、オレは刀を手に取る。
「離して」
「離さない。フィーナがクリスに手を出さないと誓うまで」
「わかった。誓うから、離して」
オレは手を離した。すぐにクリスが治癒魔法をかけてくれる。
握った時は必死だったからわからなかったけど、かなり深くまで裂けていた。後少しで指が落ちていたかもしれない。
「バカ」
クリスが小さく呟く。心配してくれることが今は嬉しい。
「レイ、あなたはこの世界の誰よりも弱いはずよ。なのに、どうして戦おうとするの？」
「どうして？　わからない。わからないけど、クリスティナは少し

の間でも仲間だから。だからかな。オレの能力はフィーナもわかっていると思う」

フィーナが作り出した氷を触った存在を凍らせる結界魔法。もしかしたら、フィーナは誰とも会いたくなかったのかもしれない。

でも、オレとクリスはフィーナと出会った。

「オレをオレとして見てくれる。クリスはそういう子なんだ。だから、助けたいと思った。例え力が無くても、行動しなければ何も始まらないから」

「そうね。レイの言う通り。だけど、あなたに力はない。体内での魔力循環が出来ないあなたは身体強化が作用しない。そんな、子供にも負けるような力で、人類最弱の力で何が」

「何も出来ないかもしれない。でも、何もしないわけじゃない。何もしなくて後悔するなら何かをしたい。この理不尽な世界に」

オレがそう言うとフィーナはポカンと口を開けた。そして、急に笑い出す。大声で。腹の底から。

「うん、決めた。私はレイについて行く。レイなら私の見つけたいものが見つかるかもしれないしね」

オレもクリスもポカンとした。だって、今までと話し方が違う上に性格が明るくなったからだ。

まるで、仮面を被っていたかのように。

「よろしくね！　レイ、クリスティナ」

その顔は幸せそうな満面の笑みだった。

第三話　人類最弱男（後書き）

レイ・ラクナールについて

かなり珍しい魔力循環が出来ない病気を持つ。そのため、身体強化などの体内に直接作用する魔法が効かない。つまり、身体強化が使える人（平均で１３歳ぐらいから）には絶対に勝てない。
核晶欠損症とは違い、魔力は自分で作ることは可能で普通の動きに支障はない。

第四話　新たな仲間

「とりあえず、自己紹介でもしない？　レイとクリスティナはお互いを知っていても私は知らないわけだし」

ココロダ山から下りてすぐ近くにあった湖の畔にオレ達はいた。

街はもうすぐなのだけど、オレが疲れたのと傷の手当てをしっかりするためにここで少し休憩することにしたのだ。

クリスティナはあからさまに嫌そうな姿勢を向けた。

「あなた一人で話しておけばいいのではないですか？　私はレイの傷を見るのに忙しいのです」

「オレは大丈夫だよ。血はもう止まっているし、クリスの治癒魔法がかなり効いているから」

「ダメです。ちょっとした油断から死ぬ時だってあるのですから」

「クリスなら大丈夫だよ」

オレはそう言うがクリスは治療を止めない。治癒魔法をかけた首筋に貼っていたテープを剥がす。

魔力素材から作られたテープで止血が主な使い道だ。

クリスはテープを剥がして治癒魔法をかけてからまた新しいテープを貼る。

「首は特に危険です。もう少し傷口が深ければレイでは助かりません」

止血魔法は治癒魔法の中でもかなり高位だがクリスなら簡単だろう。一番の問題が、オレには止血魔法が効かないというところ。

治癒魔法は魔力循環とは関係のない傷口付近のみで作用するために効くが止血魔法は体内の血の一部を凝固しやすいようにしてから集めるため、オレには作用しない。

フィーナが小さく溜息をついた。

「最悪の場合、私が止めるから大丈夫だから」

「何が大丈夫ですか？　あながレイを傷つけたんですよ！　なのに」

「それくらいわかっている。だから、私を知って欲しい。私の力は特殊だから」

その言葉にオレもクリスも息を呑んだ。何故なら、フィーナの言葉は本気で真剣だったからだ。

「フィーナ・ベルフォルトは言ったと思う。年齢は１８歳。武器はこの子、オリジン」

フィーナが微かに刀を抜く。オリジンという名前には聞き覚えがないけど、よく手入れされている刀ということはわかる。

「別名原初の剣」

「聞いたことがありませんね。レイは？」

「オレも」

オレ達がそう言うとフィーナは少し不思議そうな顔になった。そして、首をかしげる。

「おかしいな。私の近くにいた人は全員知っていたんだけどね。まあ、いいか」

そして、フィーナはその刀を地面に突き刺した。すると、突きさした部分から地面が凍っていく。

それはあまりに不思議な光景で、魔法を使わないと不可能である光景だった。

「魔法剣ですよね？」

「まあ、そんなもの。オリジンには炎と氷、そして、簡易召喚魔法が使用可能だから」

「炎と氷。熱量変換と作用変換。かなり凶悪な魔法剣だね。冒険者養成学校の魔法剣のリストにもそこまで強力なものはなかったはずだけど」

「一番上級の魔法剣ですね。各国の宝剣とされるレベルの。もしかして、炎と氷だと、氷の方が強力ですか？」

「そう。オリジンは別名絶氷の剣。氷属性の頂点に立つ武器だから」

氷属性の頂点ということは古の古文書にあるディバインナイツと同じ存在か同等の威力ということか。それはそれでかなり気になるものだ。

ディバインナイツはディバインナイツという騎士団のトップが使っていたとされる武器で切れ味、耐久度、共に世界最高クラスだと聞いている。

それと同等の剣がフィーナの手の中にあるのか。

「ちょっとした傷から深い傷までこれ一本でどうにかなるよ。ただ、消費魔力が半端ないから出来るだけ応急処置キットを使って欲しいけど」

「そうですね。絶えず能力を発動させようとすればかなりの魔力を必要としますし。レイを傷つけた理由はわかりました。でも、それでもレイを傷つけてもいいという理由にはなりませんよ」

「確かめたかったの。オリジンの力が効かない人かどうか」

そう言うとフィーナはオリジンを振った、と思う。腕の動きは全く見えなかったし、オリジンがいつの間にか鞘から抜かれて近くの木に突き刺さっている。どういう軌道を飛んだか全く分からない。

すると、オリジンが突き刺さった木が凍り始める。フィーナはオリジンを抜くが、氷の浸食は木全体を凍らす間で続いた。

「オリジンは傷つけたものを凍らせる能力を持つ。敵味方関係なく。だから、何かの手違いで傷つけた人でも大丈夫な人がいればいいな

と思っていたら、見つかった。レイがそうだった」

確かにオレはオレ自身の体内に作用する魔法やオレ自身を変化させる魔法は全く効かない。養成学校の頃はそれを疎ましくも思ったけど、こういう時に役立つとは。人生って分からないものだな。

「レイとなら一緒にいても傷つけない。ずつと一緒にいることが出来る」

「フィーナさんはもしかして、過去に誰かを傷つけたことがあるのですか？」

それはオレも思っていた。もしかしたら恋人を傷つけていたのかもしれない。だから、オレみたいな人を探していたのかも。

フィーナは予想通りに頷いていた。

「私は過ちを起こした。私のせいで戦に負けた。私がいたから」

フィーナが自分の腕を握り締める。それは完全な後悔。もう、手に入れることのできない過去を思い出しているに違いない。

すると、クリスは立ちあがった。そして、フィーナに近づいてフィーナを抱きしめる。

「大丈夫です。大丈夫ですから。私達がいます。これから、三人で旅をしましょう。冒険者のように」

「いいの？」

「私は大丈夫です。レイだってきっと大丈夫です。ダメだと言うなら顔面をひっぱたいても頷かせます」

それはそれでオレが大変なことになるかも。

「だから、行きましょう。これからの旅を」

「うん。うん」

フィーナがクリスの腕の中で泣く。多分、嬉し泣きだろう。

自分の力を一番知っている自分だからこそ、誰かを傷つけることが怖かったに違いない。そして、オレを見つけた。その力が通用しないオレを。そして、クリスも受け入れてくれた。

フィーナからすれば、また仲間を手に入れたというものか。失ったはずの仲間というものを。

オレは二人の様子を見ながら穏やかに笑みを浮かべる。

「さてと、街に戻りますか。新たなクエストでも探しながら王都に戻ることにしよう」

これからの方針を勝手に決めるけど、二人は頷いてくれるだろう。

これからの旅が本当に楽しみだ。

第四話　新たな仲間（後書き）

フィーナ・ベルフォルト　１８歳
身長１６９ｃｍ　体重??ｋｇ
武器：オリジン（刀）
ポジション：フロント
得意魔法属性：炎

第五話　クエストへ

ココロダ山の近くにある町の酒場。そこは前に来た時と違って賑わっていた。まあ、日にちが違うのと、時間帯が夜だということだろう。

ちなみに、日にちが変わったのは色々としていたから。特に、オレの剣を改めて作りなおしてもらっていたから。まあ、剣の残骸を繋げただけだけど。

まともな剣がなければ買いなおさないとクエストを受けることすらできない。

「ご来店、ありがとうございます」

クリスを連れたオレ達が入ってきた時、周囲に聞こえないようにマスターが言ってきた。周囲に聞こえないようにしたのはクリスがいることでいろいろと騒がしくなることを考慮したのだろう。

オレ達はちょうど空いていたカウンター席に座った。

「ここ、結構混むんだね」

「今から稼ぎ時ですし」

オレの言葉にマスターが笑みを浮かべる。それにはオレも同意だ。

「へえ～、この世界の酒場は普通なんだ」

フィーナが何に感心しているかわからないが、そもかく、何かに感心しているようで周囲を見渡す。周囲は街の人も多いかもしれないが、冒険者の姿もかなり見受けられる。

冒険者だとわかるのは姿や恰好もだが、荷物の大きさだ。旅人にしては重装備すぎる。冒険者はそれほど準備万端でなければならない。ちなみに、オレも準備万端だ。戦闘をすることを除けば。

「それにしても、冒険者が多いですね。何かのクエストでもあるのですか？」

「はい。私も昨日の夜聞いたのですが、大規模な討伐クエストが行われるみたいで」

大規模な討伐クエストということは国が主導かかなりのお金持ちが行うとても大事なクエストだ。人数制限いないなら四角関係なしで参加することが出来る極めて大規模なものでその分、危険性が極めて高い。

今までの街を渡り歩いていた情報から考えて、この地域から推測すると、

「ドラゴン退治？」

「知っていたのですか？」

マスターが意外そうな顔になった。確かに、昨日話した時なんてそのことを一言も話していなかったしね。そう思ったのもついさっきだし。

「ドラゴンが暴れているって噂はクリスも聞いていたよね？」

「はい。街が何個か破壊されたと聞いています。国が動くと聞いていましたが」

「多分、国と冒険者ギルドが共に行うと思う。ドラゴンはそれだけ強大無比な力を持っているし。でも、ドラゴン退治ならオレは足手まといかな」

ひたすら逃げることしかできない。クリスの様な魔術の才能があればいいけど、そんな才能があったらソロで行動していないだろうな。クリスはかなりやる気満々みたいだけど、今回だけは遠慮してもらわないと。そうじゃないと、オレが死ぬ。

「レイ、参加しない？」

すると、フィーナが意外な声を上げた。オレは純粋に驚いてしまう。

「フィーナ、ドラゴンの強さを知って言ってるのか？」

「うん。それで、そのドラゴンっていったい何体くらいいるの？15体までならどうにかなるけど。あっ、もしかして、ドラゴンじゃなくて竜の括り？」

「何を言っているかレイは理解できますか？」

無理です。そもそも、ドラゴンと竜は何が違うのかわからないし、真顔でドラゴン15体くらい相手に出来るってそれはそれでおかしいとは思う。でも、フィーナのオリジンは常識離れした性能だから

わからないわけではない。

ちなみに、マスターはポカンとしているし、周囲も静まり返っている。

まあ、ドラゴンを簡単に相手にできると平気で言ったからな。

「嬢ちゃん。冗談はほどほどにした方がいいぞ。そんな細い体でドラゴンに勝つとか夢見てんじゃねえぞ」

その言葉を発したのはいかつい顔というか、歴戦の戦士の傷跡を持つ顔をした大きな男。全身鎧を着ながらもその動きは軽やかだ。見ただけでわかる。冒険者の中でもかなり上のクラスの冒険者だ。

すると、フィーナはその男の言葉を鼻で笑った。

「ごめんね。この世界のドラゴンとは会ったことがないから。でも、一体だけなら私一人で相手にできるよ」

冗談ではなさそうなところがかなり怖い。フィーナの実力なら本当にするだろうから周囲は笑い飛ばしているが、オレとクリスは笑い飛ばせない。

「表に出ろ。そんなに実力があるなら俺らが見てやるよ。その後もな」

また、周囲が笑う。だけど、それは下品な笑み。多分、フィーナに勝ったつもりでいるんだろうな。

オレは小さくため息をついた。

「フィーナ。その刀を使ったらだめだよ」
刀を抜こうとしたフィーナをオレは止める。ここでオリジンを抜けばココロダ山の二の枚だ。だから、抜かせることはさせない。
「強さを証明したいならクエストで見せればいい。余計なところで力を使わないように」
「ガキ。何様のつもりだ？　俺はお前と話していない」
「連れの言葉なら気にするな。こいつもクエストはやる気満々なんでね。オレ達だってクエストは受けるさ。ドラゴン退治のクエストは参加した方がいいからな」
「止めた方がいいぜ。今回は少数精鋭。実力のあるメンバーでしか構成されない。お前らみたいなガキの集団じゃ不可能だ」
つまり、まだクエスト参加の受け付けは始まっていないのか。だったら、いくらでも可能だな。
クリスもフィーナも実力だけなら申し分はない。一番の問題はオレになるけど、そこはそこでどうにかするしかないだろう。最悪、無償での参加を具申するしかない。
「ガキ。表に出ろ。女は許してもお前だけは許せん。何様のつもりだ？　この俺に指図しようだなんて」
ちらりとクリスとフィーナを見る。二人はゆっくり頷いてくれた。もしもの時は任せた。

「同じ冒険者だけど？」

「ふざけるな！」

男が動く。だけど、それより早くフィーナの刀が首筋に当てられ、クリスの杖が抜き放たれた剣を絡め取っていた。

うん、男のオレは何も行動していないってすごく最低だよね。

「これ以上動けばあなたの首が飛ぶよ」

「動きは封じさせてもらっています」

あまりに息が合いすぎている気もするけど、この二人なら納得かな。

オレは小さくため息をついてマスターにかるく謝った。

「すみません。今日はこれで出ます」

「またの来店をお待ちしております」

オレが立ち上がるとフィーナは刀を引き、クリスは杖を戻した。男はまだ呆然としている。

まあ、二人の動きが襲う以上に良かったから上手く行ったけど、もし、ほんの少しでも遅れていたならオレの首は飛んでいたかも。そう考えると少し怖くなってくる。

「レイ、これからどこに行くの？」

オレの後を追って酒場から出たフィーナがオレに尋ねてくる。オレは頷いて応えようとしたところ、クリスが話に入ってきた。

「国が経営するクエストを受諾する場所ですよね。今回は少数精鋭だと聞いているので色々選定があると思いますけど」

「二人なら大丈夫だな。二人なら」

オレは確実に無理だけど。

第五話　クエストへ（後書き）

クリスティナ・アピニオンについて

アピニオン王家第三王女で王位継承権第１２位であるれっきとした王女。ただし、自由奔放なところがあり、国王もそれを認めているため、レイと二人で行動も出来る。魔術の才能は一級クラス。自分を守りつつレイも守れるくらいに強い。

第六話　内容（前書き）

とりあえず、この話で第一章の主要味方キャラは出揃います。

第六話　内容

「うわっ」

オレは思わず口に出していた。そこに書かれていた内容を見たからだ。はっきり言って、かなりマズイクエストだと思う。クエスト内容はドラゴン退治なのだが、その注釈に書かれている文字が、

『王国騎士団壊滅。リットン冒険団全滅』

王国騎士団と言えばかなり大規模な騎士団だ。ただ、戦力から見てもそれほど比重は高くないが、問題はリットン冒険団の方。そこはかなり有名な冒険者ギルドの一つで、最強と言われる冒険者が何人か在籍しているはずだった。

それすらも壊滅か全滅。ドラゴンの力が桁違いということだけわかる。

それを見るクリスの顔は険しい。

クリスにとって王国騎士団は馴染みが深いはずだ。もしかしたら、王国騎士団の実力も知っているのかもしれない。

「王国騎士団ってどのレベル？」

「熟練度や武器から考えてリットン冒険団と同等かそれ以上です。騎士団の団長がフラブルですから」

ああ、あの『烈火の騎士』か。騎士団の中で最強と言われる炎を操

る魔法剣士。未だに無敗というわけのわからない記録を作り出しているとか。かなり凄い人が率いていたのか。

オレはそのクエスト表に手を伸ばした。すると、同じように手を伸ばした人がおり、お互いに遠慮するように手を止める。

「「ごめんな」」

オレの言葉が途中で止まった。同じタイミングで向こうの言葉も止まる。そこにいたのは見知った顔。神は長くポニーテールに括っており、少し目は厳しさがあるが、凛々しさもあると言える顔で服装が冒険者御用達のジャケットとズボンの上から軽装甲の鎧を身につけている。

「フィラ？」

「あんた、レイ！　どうしてここにいるのよ！」

「フィラこそ。王都を中心に活動するって聞いていたけど」

フィラ・ファンブール。それが彼女の名前だ。簡単に言うなら同級生という間柄だろう。

ただし、僕が劣等生に対し、フィラは優等生。接点はほとんどないはずなのに何故かよくいたというわけのわからない関係をしている。

「フィラさん、どうかしたの？　あれ？　レイ？」

フィラの後ろから顔をのぞかせたのは身長が１４０ｃｍもない子供の様な高さ。顔も童顔であり、髪の毛も長くもなく短くもない。た

だ、全身鎧を着ているところがミスマッチだった。

「リークもいたのか。まあ、お前らコンビだもんな」

「コンビじゃなくて双子だから」

フィラが少しむくれながら言う。ちなみに、フィラは１５８ｃｍと普通なのだが、リークと一緒にならべば年の離れた姉弟にしか見えない。ちゃんとオレと同い年なのに。

クリスが誰ですかと視線で尋ねてくる。オレは視線で少し待ってと返した。

「フィラ達もこのクエストを受けるのか？」

「ええ。ドラゴン退治は危険だけど、ここでこれに参加しておけば有名になれそうだし」

「問題が僕達じゃ死にそうなんだけどね」

確かにそうだろう。かなり有名な二つの団体が壊滅か全滅というありえない事態に直面している。ここで死にそうじゃないという奴がいるならオレは本気で驚くな。

「そういうもの？」

フィーナが不思議そうに言う。そう言えばいた。一人だけ。

「レイには無理よ」

「オレにはな。こいつらが参加したいみたいだから参加するだけだ。登録するなら一緒にしようぜ」

オレはそう言ってクエスト表を手に取った。だが、手に取った瞬間に別に人にかすめ取られる。

クエスト表は本来取った人が優先だ。これは完全なマナー違反。

オレはかすめ取った奴の顔を睨みつけた。

「最弱の男が行うクエストじゃねえよ」

「お前か。ガイウス」

そこにいたのはこれまた懐かしい奴だった。優男の顔をしており、身につけている鎧から件まで全てがピカピカ。完全に金持ちのボンボンだ。そして、貴族でもある。

「ガイウス様だ。特に貴様のような弱者に呼び捨てられるのは嫌いでな。お前の命を助けてやるんだ。感謝」

「レイ、これをどうすればいいの？」

ガイウスの手にあったはずのクエスト表はいつの間にかフィーナの手の中にあった。オレもガイウスもこのことに関しては本気で驚いている。

ガイウスなんて口を開いた間抜け面のまま何も言えないでいる。

「ちょっと待って。その表を持ったまま受付に行く。フィラ、リー

クも行くよ」

「え、ええ」

フィラも一部始終を見ていたから信じられないという風だった。実際にオレも信じられない。でも、フィーナの実力から考えればこれぐらい朝飯前の様な気もする。

フィーナが受付にクエスト票を出した。受付がをそれを見てフィーナの顔を見る。

「クエスト参加の方はあなた一人ですか？」

「オレ達もいる。とりあえず、代表者としてオレの名前を書くか」

受付から渡された紙に自分の名前を一番上の欄に書く。一応、団体で来た時の記入表だ。バラバラにされるよりチームがひとまとめになった方が強いことがあるためこういう風に書かされる。

オレは名前を書き終わるとそれをフィラに渡した。フィラがすぐに書いてリークに渡し、続いてフィーナ。最後にクリスに渡った。

「書きました」

クリスが受付に記入評を提出する。それを見た受付の動きが固まり、そして、クリスの顔を見た。多分、軽装甲の鎧にあるエンブレムを確認しているのだろう。

フィラがオレを肘で小突いてくる。

「ねえ、なんで女連れ？」

「変な風に言うな。クリスとはクエストで出会って、フィーナはちょっと前に出会っただけだ」

「ふーん。まあ、いいわ。私とリークは先に出ているわ。早く来なさいよ」

ここは妥当な判断だろう。たくさんの人がいればそれだけ見動きはしにくいし、はぐれる可能性だってある。受付の方もほとんど終わっているらしく、クエスト受諾表を作っていた。でも、選定があるんじゃないのか？

「選定はないのですか？　そう聞いていますが」

クリスも同じように思ったらしい。確かにクエスト表の方にも選定があると書かれてある。

「参加者が少ないので選定はなくなりました。今、このクエストを受けているのは皆様方をいれて八人です」

かなり少ない。いや、めちゃくちゃ少ない。冒険者の中では勇名をはせようとする人たちが多い。そのために冒険者になる人だっている。

ドラゴン退治だなんて勇名を作るにはもってこいの仕事なのに。やはり、騎士団と冒険団の壊滅と全滅が影響しているのか。

「ありがとうございます。レイ、フィーナ、出ましょう」

「そうだな」

「ちょっと待て」

ガイウスの声にオレはクリスとフィーナの背中を押して外に向かわせる。この状況でガイウスに用があるのはオレだけだろう。

「貴様、貴族に対して何をしたかわかっているのか？」

「貴族様を殺させないようにしただけだけど？」

オレは皮肉で返す。先ほど言われた言葉を反対にしただけだ。ただし、優等生が劣等生に言われでもしたらどうなるかは知らない。

「貴様、この場で殺して」

ガイウスが剣を抜いた瞬間、そのピカピカの剣が柄を残して落ちた。いつの間にかオレとガイウスの間にはフィーナの姿がある。フィーナは刀の柄から手を離した。

「レイ、行くよ」

そして、オレの手を引っ張って外に連れて行く。多分、ガイウスが剣を抜くのがわかってフィーナが入ってきたのだろう。正直に言ってありがたかった。ガイウスには確実に勝てないし。

フィーナのオレを握る手は微かに震えている。それをオレは気づかないふりをして外に出た。外にいるのはポカンと口を開けてアホ面をしたフィラとリーク。

オレはフィラの鼻をつまんでやった。

「何するのよ！」

「顔が面白かったからつい」

「ついじゃないわよ、ついじゃ！　とりあえず、宿にしましょ。少し疲れたわ」

それに関しては賛成だ。

第六話　内容（後書き）

フィラ・ファンブール　１７歳
身長１５８ｃｍ　体重？？ｋｇ
武器：ナイフとメイス
ポジション：フロント
得意魔法属性：風

第七話　自己紹介（前書き）

最近少し不調気味です。

第七話　自己紹介

少し大きめの少し値段が高めの宿屋。そこの大部屋にオレ達はいた。七人部屋らしく、ベッドは全部で七つ。かつ、かなり広々としている離れなのでクリスがいる今はありがたい。

このことをフィラに話したら、フィラは今でも呆然とクリスを見ている。まあ、王女が冒険者の真似事をしているとは思っていないだろう。

そのクリスは部屋に入った瞬間に荷物を置いてベッドにダイブしていた。それをちょうど入ってきたフィーナがクスクス笑う。

「クリスティナ、はしゃぎすぎ」

「久しぶりのベッドです。それに、ふかふかしすぎないこの感触は最高ですから」

フィラがオレのわき腹を肘でつついてくる。

「王女がいるのにこんな部屋でいいの？」

まあ、普通はそうだろうな。

「仕方ないだろ。手持ちの金を考えてこれが精一杯だ。王都に戻るまで後２００エルトしかないし」

「十分じゃない」

まあ、２００エルトもあれば王都までの道のりはかなり豪華にいける。馬車を使ってもお釣りがくる。でも、世の中は理不尽だ。何が起きるかわからない。

特に、オレは弱いから。

「病気になったり怪我をしたらどうするんだ？　世の中は理不尽だ。オレ達が思っているほど甘くない。だから」

「だからお金が必要？」

フィラの言葉にオレは言葉を止めた。図星だったからだ。あの時、もっと早くお金を集めていればと思えて仕方がない。

オレは目を伏せる。それにフィラは小さく溜息をついた。

「あんたね、世界が全て理不尽だと思わないでよ。私だってお金があるんだからクエストの間ぐらいは出してあげるわよ」

「フィラさん、そこは僕にも同意を取ってよ」

「いいじゃない。あんたは私の奴隷なんだから」

フィラはそう言うが、実際にフィラとリークの関係はそうだった。双子であり主人と奴隷。簡単に言うなら、オレが出来なかったことをフィラは成し遂げた。

オレはそれが羨ましい。

「まあ、いいわ。まさか、あんたとこんなところで再開するとは思

わなかったし、とりあえず、自己紹介しない？　私は王女様ともう一人は初めて会うから」

「そうですね。私はクリスティナ・アピニオン。アピニオン王家第三王女です。今は冒険者ですので気軽にクリスティナとでも読んでください」

「質問ー！」

フィラが手を挙げた多分、質問したい内容はあれだろうな。

「どうしてレイはクリスって呼ぶの？　クリスは男の人の名前のはずよ」

「なんとなく」

オレは即答でこたえた。最初、クリスがオレに命じたことが、

「自分を王女だと思わないでください。できれば、あなたと同じ冒険者として見て欲しいです」

だったので、オレはクリスティナのことをクリスと呼ぶようにしたのだ。そう呼べば顔を見ない限りクリスティナ・アピニオンともわからない。

それがいつの間にか定着しただけのこと。

「なんとなくって、相変わらずみたいね」

「どうして相変わらずなんですか？」

「冒険者養成学校の頃と変わらないのよ。あっ、私はフィラ・ファンブール。こっちがリーク・ファンブール。レイとは同期の生徒だったの。ついでにクラスメート」

「つまり、レイが弱いのを知っているのですね」

その言葉にフィラとリークの二人は頷いた。僕の弱さは養成学校時代からかなり有名だったしね。とくに、戦闘訓練じゃ真っ先にやられるか隅に隠れているかのどちらか。完全に使えないし。

これでも戦闘が出来ないから他の技能を頑張って鍛えてたんだけどね。

「まあ、レイは戦闘には弱くても知識に関してはすごかったから。レイって基本図書室に籠もっていたのよ。そこで色々な植物についての知識とか動物についての知識を勉強したみたいで実地試験じゃ右に出る者はいなかったわ」

フィラのその言葉にクリスとフィーナの二人は信じられないような目でオレを見てきていた。その意味はわかるけどそれはかなり失礼じゃないですかね？

オレは小さくため息をつく。

「戦闘はできなくても、それ以外が出来なければ冒険者としてやっていけない。知識と行動力があれば冒険者としていけるからね」

「そうそう。レイはロッククライミングが本当に得意なんだから。確か、実地訓練で魔法を使わずに山登りをさせられた時、ロッククク

ライミングで最速記録を樹立していたわよね」

懐かしい話だ。魔法禁止だから生徒からブーイングの嵐だったけど、オレは得意なロッククライミングで一直線に山頂を目指し、ベストタイムを２０分ほど更新したんだった。最初に上がってきたガイウスの顔と言えば今でも笑える。

他にも実地試験じゃいろいろ記録を樹立していたな。

「レイってすごいんだ。あっ、私はフィーナ。フィーナ・ベルフォルト。少し前からレイとクリスティナと旅をしているの。冒険者ってほどじゃないけど、刀の扱いは得意かな」

「それよそれ」

フィラがフィーナに詰め寄る。

「ガイウスに使った高速移動術。あれ、どうやってやったの？　ガイウスも私たちも気づかない動きだったし」

「えっ？　普通に走っただけだけど？　レイが危なかったから」

その言葉にフィラが固まった。リークも固まっている。

多分、フィーナはそれが普通なのだろうが、オレ達からすればかなり特殊だとしか言いようがない。目にも止まらぬ速さなんて普通じゃ考えられないから。

フィーナは一人で次元の違う高みにいる。

「フィーナって、ドラゴンを見たことがあるって言っていたけど、ドラゴンはどんな感じ？」

オレ達の中だと、ドラゴンは見て生き残ることがかなり難しいとされている。本当に大規模な討伐隊か少数精鋭の部隊で戦うが、半分生き残ればいい方だ。

だから、オレ達は誰もドラゴンと戦ったことがない。

「えっと、ドラゴンか竜のどっち？」

「二種類？」

フィーナは頷いた。

「ドラゴンは進化の過程で生まれたもの。言うなら、あらゆる生物の頂点に立つ存在。竜は神によって生み出されたもの。竜に関しては」

フィーナがオリジンを手に取る。鞘から刀身を走らせ、虚空を薙いだ。

「神剣が無ければ話にならない。何千万もの人が攻撃しない限りには」

「あなた、何者？」

フィラがフィーナを睨みつける。その全身から警戒の色が出ていた。

理由としてはあまりにもフィーナは知りすぎている。ドラゴンと竜

なんて二つがあるなんて知らないからだ。
冒険者養成学校では生物、特に危険な生物について習うが、竜なんて聞いたことがないのに。
「神剣を持ち、常人離れをした能力。そんな存在聞いたことが」
「フィラ、今はいいよ」
オレはフィラを止めた。そして、フィーナを見る。
「確かに、フィーナについて疑問があるかもしれない。でも、フィーナが話したくないなら無理に聞かなくていい。今はクエストについて考えよう」
「はぁ、そうね。フィーナ、ごめん」
「そんな。隠しているのは私なのに」
「誰だって隠したいことがあるのに聞いたからよ。話したくなったら話しなさい。聞くくらいはしてやるわ」
その言葉にオレは吹き出していた。リークも同じように吹き出す。
それに応じてクリスやフィーナも笑い出した。
フィラがただ一人だけ顔を真っ赤にしている。
「ともかく、今はクエストについて話しましょ！」
そんなフィラをオレ達は暖かく見守るのだった。

第七話　自己紹介（後書き）

ドラゴン退治のクエストはもう少し話が入ります。

第八話　独り言（前書き）

書いていたらいつの間にか重要な話に

第八話　独り言

柄に収めていた片手剣を引き抜く。そして、それを振り上げ、振り下ろした。

簡単に言うなら素振りだ。

例え身体強化魔法が使えなくても素振りは毎日欠かしたことがない。

もし欠かしたなら、本当に足手まといになってしまう。

普通の振り上げ、振り下ろしをした後には横に振ったり斜めに振ったりする。

簡単に言うなら連撃だ。

連続攻撃の略であり、剣を上手く動かさないとなかなか出来ない。

それをしっかりやる。身体強化魔法の前では何の効果も発揮しないが、何があるかわからないから。

それに、自分が積み重ねた努力は自分を決して裏切らない。

「こんなものかな」

オレは剣を鞘に収めた。準備運動は終了だ。次は全力で振る。

「素振り？」

オレは振り返った。そこにはオリジンを腰にさげたフィーナの姿。服装はドレスだ。

オレは思わず固まってしまう。フィーナは自分のドレスの裾を掴んだ。

「やっぱり気になる？　使える戦闘服がこれしかなかったから。ただ、防御力は高いと思う。やってみる？」

「やらないから。こんなに朝早くどうしたんだ？　クエスト開始は今日の午後からのはずだけど？」

「みんなに言いたいことがあったから。後はレイだけ」

フィーナの顔が真剣になる。オレも背筋を正した。

「もし、竜だと私が判断した場合、レイも逃げて。竜には私しか対応出来ない」

「絶対に？」

「うん。絶対に」

面と言われるとへこんでしまう。フィーナのような女の子だけに任せるなんて嫌だけど、足手まといになるなら我慢するしかない。

本当は一緒に戦いたいけど。

「わかった。でも、約束して。絶対に戻ってくるって。フィーナは竜程度にはやられないよな？」

「うん、竜ならやられない。竜程度なら」

フィーナだって人の子だ。もしかしたら、フィーナが勝てない存在があるかもしれない。その時はオレ達も戦うだけだ。

フィーナがオリジンを鞘から抜く。あくまでゆっくりと。だが、鞘から抜かれるまでの時間は一瞬のように思えた。

光が反射している。まるで、磨かれた鏡のように。

「これからは私の独り言だと聞いてね」

フィーナが静かに腕を動かし始める。オリジンが光を反射させながら煌びやかに動く。

それはまるで舞踏。恐ろしいまでに美しい舞踏だった。

「私は昔、大切な人を失った」

腕だけではなく足も動かしていく。時に激しく、時に静かに。

「それは、私じゃ、私達じゃどうにもならないくらいの運命に対抗しようとして。そして、私は生き残った」

もしかして、フィーナが今一人なのは、

「オリジンを片手に私は思った。どうして私なんかが生き残ったのかって」

次第に腕の振りが早くなっていく。

「だから、私は全てを拒絶しようとした。近づく全てを止めながら」

オリジンの先が止まる。周囲にはいつの間にか粉雪が舞っていた。オリジンで空気を斬ったことによる粉雪。

それは怖いくらいまでに幻想的な光景。

「そして、レイやクリスティナと出会った。私を受け入れてくれる人を見つけた。私はまだ、一人じゃないと思えた」

オリジンを鞘に収めながらフィーナがオレを見てくる。

「だから、私はもう失いたくない。大切な仲間を」

「そっか、なら、オレの独り言を聞いてくれ」

オレの言葉にフィーナが頷く。それを確認してオレは語り出した。

「オレは冒険者を目指していた。どんな困難にも立ち向かい、新天地を開拓しようとする冒険者の姿は羨ましかった」

だから、オレは冒険者を目指した。

「冒険者を目指したのはオレと幼なじみ、何の因果がわからないけど、フィナって名前なんだ」

フィーナ、フィラ、フィナとよく似た名前が多いけど、それは事実なのだから仕方ない。

「フィナの家は貧乏だった。本当に貧乏だった。そして、オレが冒険者養成学校の入学が決まった日、フィナは売りに出された。人身売買だ」

人身売買なんてものは表では行われていない。全ては裏の取引。

「すぐにお金を作ってフィナを取り返した時、フィナの心は壊れていた」

フィーナが息を呑んだのがわかった。オレは拳を握り締める。

「フィナの最後の言葉が『殺して』だったんだ。だから、オレはこの手でフィナを殺した」

あの日、フィナを殺した日、そんなオレを発見したのが他の幼なじみだった。そいつの話ではオレは三日三晩ほど何の反応もしなかったらしい。

目は開いているし普通に食事もした。だが、返事はしない。実際に三日三晩の記憶はない。

「それからかな。冒険者として力を入れたのは。必死に勉強して、必死に覚えて、戦闘以外はあらゆることを普通にこなせるようにした。まあ、戦闘が出来なければ冒険者失格なんだけどね」

オレは一旦言葉を切り、そして、続ける。

「だから、オレは失いたくない。クリスだって、フィラだってリークだって、そして、フィーナだって誰も、もう、誰も」

「レイ」

「だからさ、無理だと感じたら逃げてくれよ。誰かが死ぬところなんて、もう、見たくないから」

フィーナがゆっくり頷いた。オレの過去を言うのは久しぶりだ。フィラに言った時以来か。クリスにもまだ言っていない。クリスに言ったなら確実に人身売買について調べようとするから。

するとフィーナが小さく息を吐いた。

「ところで、いつまで隠れているの？」

「えっ？」

「はぅっ」

その声にオレが振り向くと、そこには扉を開けて出てくるクリスの姿があった。今の話を聞かれた？

「盗み聞きとは大層な御趣味だね」

「そ、そう言うわけじゃないのですよ。レイがいつものように朝練をしているだろうなと思って来たらお二人が話していたので」

クリスの目が真剣になりオレを見てくる。

「レイ、人身売買をしていたのはどの貴族ですか？」

「ダメだ。クリスが踏み言っていけない領域だから。下手に深く入れば、例えクリスでも殺される」

「もしかして、ロバン伯爵？」

その問いにオレは頷きだけで返した。ロバン伯爵はその筋ではかなり有名だ。簡単に言うなら、違法手段によって富を築きあげている。そして、その真実を知ったものは闇の中に葬られていく。

それは王族であっても同じだった。

「オレは仲間を失いたくない。だから、クリスは動かないでくれ。ロバン伯爵との決着は」

鞘から引き抜いた剣をオレは勢いよく地面に突き刺した。

「オレがつける」

第八話　独り言（後書き）

リーク・ファンブール　１７歳
１３９ｃｍ　体重４０ｋｇ
武器：片手剣と盾
ポジション：フロント
得意魔法属性：大地

第九話　罠

装備を確認する。食料よし、工具よし、ロープよし、アイテムよし。後は、剣も身につけているから十分だ。

オレは小さく息を吐いて周囲を見渡した。周囲には、心配した顔のクリスに話しかけるフィーナ。その二人を見ているフィラ。リークはオレの隣にいる。

他の参加者は歴戦の冒険者らしき人達とガイウスだ。

「レイ君は緊張している？」

リークが尋ねてくる。リークは誰が見ても震えているくらいに緊張していた。

今、オレ達がいるのはクエスト受諾表に書かれていた集合場所にいた。町の外にある広場。

ここからクエストが始まる。

「緊張していると言えばしている。まあ、人類最弱男に出来ることなんて限られているけど」

「確かにレイ君は最弱かもしれないよ。でも、僕もフィラさんも、おそらくガイウスもレイ君が一番勇者の資格を持っていると思っているはずだよ」

「何で？」

そんなことはしたことがない。というか、記憶にない。

「フィラさんと一緒に崖から落ちた時、レイ君は片腕が折れていたのにフィラさんを背負って崖を登りきった」

そう言えばそんなことがあった。あの時は足を踏み外したフィラを助けるために手を伸ばし、結局は一緒に落ちたのだ。

右腕は折れて左腕だけだったけど、両足に怪我をしたフィラを背負ってオレは崖を登りきった。

あの時はガイウスに「バカかお前」と言われたっけ。

「他にも、魔物と遭遇した時にレイ君は戦っていた。たくさん逃げる人がいた中でレイ君はただ一人剣を抜いて立ち向かった」

まあ、結局は魔物の攻撃で怪我をしたけど。

リークが笑みを浮かべる。

「レイ君は身体強化魔法が使えなくても立派な強さを持っている。それは僕達もわかっているよ」

「そういうものかな？」

いまいち自分にはわからない。戦闘は全く出来ないけど、救える人を救えないのは嫌だったからオレは今までやってきた。

フィラの時だって魔物の時だって、それを元にやってきた。

「強さは人それぞれだと僕は思うよ。フィラさんだって思ってる。レイ君は戦いは出来なくても諦めないことを知る人だって」

「買いかぶりすぎだ。おっ、揃ったみたいだな」

オレの言葉にリークが振り向くとそこにはフード付きのマントを深くかぶった人がいた。背丈は小さい。まるで子供だ。その手に握られているのが赤いクエスト受諾表。

クエストを依頼した人物が持つものだ。

これから、クエストが始まる。

「準備はいい？」

フードを身につけた人物、声は女の子、の声が響いた。誰もが緊張した面持ちで頷いている。緊張していないのはフィーナだけか。

でも、少し心配だ。

「今からドラゴンの目撃例が多かった場所に向かう。三日以内に見つからなかったらクエストは破棄するから」

その言葉にオレ達は頷く。

ドラゴンも生物だ。常にそこにいるとは限らない。移動されていたなら見つけるのが時に困難になる時がある。

そういう場合は仕方ない。

「ついて来て」

フードの女の子が歩き出す。それを追いかけるようにオレ達も歩き出した。オレの位置は一番後ろだけど。左にはフィーナがいる。

隣に並んでわかったが、フィーナは緊張している。その緊張を周囲に出さないようにしているだけだった。

「フィーナ、大丈夫？」

「レイ。うん、何か嫌な予感がしただけだから。でも、大丈夫。私だけじゃない。クリスティナやフィラ、リークがいる。今の私は一人じゃない」

「オレもカウントして欲しかったな」

「欲しかったら強くなること」

オレはフィーナの言葉に苦笑した瞬間、オレの右手を誰かが掴んだ。右を向くと、そこには少し膨れたクリスの姿があった。

「私だって緊張しています」

「うん、そうだね」

それは見たらわかる。この中で一番緊張しているのはどう見てもクリスだ。冒険者の中でもクリスはかなり異質ななり方をしている。

本来、冒険者は冒険者養成学校に入る。でも、クリスは冒険者養成

学校に通わず国からの伝手で冒険者になった。まあ、フィーナもクリスの権限で冒険者扱いしているけど。

冒険者養成学校では戦闘訓練もする。大規模なものだ。それを体験したからこそ緊張はまだ少ない。クリスの場合は戦闘経験が少ないから緊張している。

「大丈夫。オレは頼りにならないけどフィーナやフィラがいる。落ち着いて」

「はい」

それでもクリスは緊張したままだ。すると、フィーナが立ち止まった。それに気づいたオレやクリスも立ち止まる。

「待ちなさい」

そして、フィーナの言葉が響き渡った。誰もが足を止める。そして、全員がフィーナに視線を合わせた。

その時、オレは気づいた。周囲の異変を。

オレ達が歩いているのは森の中だ。でも、何故か周囲に気配がない。動物の気配も。

どうやらそれはフィラやガイウスもわかっていたらしくフィーナに注意を向けているのではなく、周囲に注意を向けていた。

フードの女の子がフィーナに近づく。

「早くしないと遅れる」

「ええ、わかっているわ。その前に」

フィーナの目が微かに細まった。

「周囲を囲んでいる人達は何？」

その言葉にクリスやリーク、他の冒険者達が慌てて周囲を見渡す。どうやら気づいていたのはフィラとガイウスだけらしい。

フードの女の子は微かに身を揺らした。

「そんなわけが」

「なら聞くが」

ガイウスがフードの女の子の言葉を遮る。

「何故、貴様から猫の匂いがする」

その瞬間、フードの女の子が後ろに下がった。それと同時にフードが脱げて顔が見えてくる。その頭にあったのは猫耳。

冒険者達が一斉に剣を抜くのと周囲から同じような猫耳をして武装した人達が現れるのは同時だった。

「獣人族か」

オレは剣を抜きながら呟く。まさか、ドラゴン退治のはずが魔物退

治になるなんて。

「ここで殺す。あなた達に恨みはないけど、竜神様を怒らせる真似はさせない」

オレ達をここまで案内していた獣人族の女の子が腰からナイフを抜いた。本当なら完全に油断したところで殺すつもりだったのだろう。でも、フィーナに見破られた。

竜神様という言葉には気になるが、今は生き残ることを、

ズシン。

地面が揺れた。誰もが動きを止め、武器を下ろしながら周囲を見渡す。

地震じゃない。地震の揺れはここまで一時的じゃない。でも、揺れた。

ズシン。

まただ。また、音と共に地面が揺れた。

「そんな」

周囲を見渡せば獣人族が顔を真っ青にして武器を落としていた。まるで、何かに恐怖するように。

「嘘、だよね」

その言葉はフィーナの言葉。まるで、信じられないものを見つけたように。

オレは周囲を見渡す。もう、音はしない。揺れもしないでも、誰かがやって来るのがわかった。

強烈な気配。立っているのがやっとで座れば立ち上がれなくなるであろ殺気。

唾をごくりと飲み込む。その場にいる誰もが動けないまま、森の中から一人の少年が現れた。

目は長い前髪で隠れているからわからないが、その顔に浮かんでいるのは笑み。

「何をしているのかな？」

その言葉に反応したのは獣人族だった。特に、一番近くにいたフードの女の子が腰を抜かしたのかその場に座り込んでいる。

嫌な予感がする。

「邪魔をしないで欲しいな。彼らは僕の餌になのに。しかも、女の子が三人も」

舌が、人にしては異様に長い舌が少年の口から飛び出ていた。

「エンシェント、ドラゴン」

フィーナが小さく呟いた。その目に映っているのは驚愕の表情。

「さあ、誰が楽しませてくれるのかな？」

第九話　罠（後書き）

ドラゴンはドラゴンでもエンシェントドラゴンとの戦いです。その戦闘能力とは・・・

第十話　エンシェントドラゴン（前書き）

プロローグにあった、三人の少年とその仲間達、ですが、三人の少年が揃うのはまだまだ時間がかかります。後、十話は出さない予定ですので。

第十話　エンシェントドラゴン

周囲一帯に張り巡らされた強力な殺気にオレ達は動けないままだった。フィーナは手に持つ刀を大きく揺らしている。いや、手自体が震えている。

このままじゃ全滅する。

「竜神様」

エンシェントドラゴンの少年の一番近くにいた女の子の獣人族が小さくつぶやいた。その言葉に少年の目が細まる。

「その名前で呼ばないでほしいな。僕達は君達のような下等な生物とは根本的から違う存在なんだよ。次に呼べば君達一族は根絶やしにしよう。うん、それがいいや」

その言葉は圧倒的なまでの力の差があるからこその言葉。オレは剣を握り締めた。どうすればいい。どうすればこの場から脱出できる。考えろ。今自分に出来ることを。

下手に動けばやられる。でも、動かなくてもやられる。頼みの綱はフィーナ達だけど、誰も動けない。どうすれば動かすことが、

「へぇ、君は僕に抗うつもりなんだ」

目の前に少年がいた。背筋に寒気が走る。体が完全に硬直して動かない。蛇に睨まれた蛙だ。

背筋に汗が流れる。呼吸が少し洗い。心が冷静でいられない。

「すごいね。ただの人間なのに、僕に抗おうなんて」

少年の手がオレの腹に触れる。このまま黙って殺されるわけには、

「まだ抗うつもりなんだ」

その瞬間、少年の人差し指がオレの腹を微かに突き刺さった。痛みが出るが、我慢できない痛みじゃない。

「勇気ある下等生物に僕は敬意を表してあげよう。この中で一番苦しめてあげる。僕の毒で」

そして、何かが入り込んできた。オレはその場に膝をつく。だけど、痛みは一向に襲いかかってこない。

あれ？　どういうことだ？

「頑張るね。この毒は入った瞬間に痛みでのたうち回るはずなんだけど、君はどうやら根性があるらしい。そういう生物は嫌いじゃないよ。さあ、君は痛みの中でのたうち回りながら仲間が殺される光景を見ていればいい」

オレはその場に倒れた。そっか、今言った毒は魔法なんだ。僕にそのタイプの魔法が効かないことをこいつは知らない。とりあえず、今は演技でもしないと。

「さて、次は誰を殺すとしようかな。神に刃向った下等生物に裁きを下してやろう」

「神に刃向った？　冗談はやめてください」

クリスが杖を構える。それに応じてみんながそれぞれ武器を構えた。

「神はこの世に存在しません。存在するとするなら、それはそれぞれの心の中にしかいないのです。あなたに神を語る資格はない。神は万物の真理にして平等の存在。あなたは神じゃない」

「人間が神を語ろうと言うのかい？　君は詩人だね。神は君が思っているほど万能じゃない。そして、平等でもない。君の中でも違いがあるだろ？　それなのに平等だとでも」

「違いがあるからこそ、平等があるのです。違いがなければ平等は存在しません」

「違いが平等？　ふははっ、餌の分際で何を」

その瞬間、フィーナが地面を蹴った。姿勢を低くしオリジンを一閃する。完全に隙をついた攻撃。だが、その剣先は少年にかすることはなかった。少年の姿はフィーナの横にいる。

「僕に刃向うとは、愚かな」

少年の手が動いた。フィーナが慌ててオリジンで受け止めようとするが、フィーナの体はまるで木の葉の様に吹き飛び僕の近くの木に激突した。オリジンが僕の目の前に突き刺さる。

威力が違う。あのフィーナを一瞬で。

「さあ、次は」

少年の頬をナイフがかすった。かすった部分からは赤い筋が出来上がり、少年の頬に血が流れる。

ほんの些細な傷。それを与えたのはフィラだった。

「刃向うことが愚か？　ふざけないで。立ち向かうことを恐れる冒険者は少ないわ。私も、あんたがいくら強くても、私は戦う。クリスティナは逃げなさい。時間は稼げないかもしれないけど」

フィラがナイフの先を少年に向けた。リークも盾を構える。

それに応じるように他の冒険者も武器の先を少年に向けた。もちろん、ガイウスも。

「貴様ら。下等生物の分際で！」

少年の体が変わる。人の体をしていたはずがだんだん大きくなっていた。体は黒く、そして、ドラゴンとして述べられている形に。

ただ、違う点を挙げるとするなら、その額には一本の角が生えている。

『殺す。殺す。殺す！』

「レイは倒れたままでお願い」

エンシェントドラゴンとなった少年を見たいたオレの耳の中にフィーナの声が聞こえてきた。多分、エンシェントドラゴンの思考の中

からはオレのことは完全に除外されているはずだが、まだまだしていた方がいいみたいだ。

オリジンが引き抜かれる。そして、フィーナが不適に笑ったような気がした。

「珍しいエンシェントドラゴンだと思っていたら、あなた、一本角だったの？」

その言葉にエンシェントドラゴンの動きが止まった。そして、その視線がフィーナの方を向く。

「なんだ。まだ生きているエンシェントドラゴンだから三本角以上だと思っていたら、一番弱い一本角だったとは。興醒めね」

『貴様、何様のつもりだ。この我に勝とうとでも言うのか！』

言葉遣いが変わっている。でも、エンシェントドラゴンの口から吐かれたのはまごうことなき炎の塊。それに向かってフィーナはオリジンを構えた。

「炎は、私の得意分野だよ」

その小さな言葉と共にフィーナは冷気と氷を作り出した。その冷気と氷にエンシェントドラゴンの炎が直撃し水蒸気を作り出す。

だが、エンシェントドラゴンが放った炎は作り出された氷に阻まれて霧散していた。エンシェントドラゴンは目を見開いてフィーナを見ている。

炎の威力はけた違いに高い。それは、周囲に飛び散った炎でわかる。だって、木々を燃やすどころか一瞬にして溶かしたのだから。理論上おかしいような気もするが、これがドラゴンの炎なのだろう。

多分、フィラ達に向かって放たれていたら確実に全滅していた。

『貴様！　『絶氷の魔女』か！』

「行くわよ！」

フィーナのその言葉と共にクリスが杖を振った。炎の槍がエンシェントドラゴンに向かって放たれて翼に突き刺さる。さすがはクリスだ。魔法の威力も一級品。

フィラ達もエンシェントドラゴンに向かって飛びかかっていたる。誰の目にも恐怖はあるが勇気を振り絞り地面を蹴っている。

今、エンシェントドラゴンとの戦いの火ぶたが切って落とされた。

第十一話　最弱の力（前書き）

レイの能力が切り札です。

第十一話　最弱の力

フィーナの手にあるオリジンがエンシェントドラゴンの翼を大きく切り裂いていた。向かってくる尻尾の攻撃に対しては上手く飛び上がって回避する。そこにクリスの魔法が殺到する。

エンシェントドラゴンの体に突き刺さる魔法。

『貴様！』

エンシェントドラゴンがクリスを狙う。だけど、その前にガイウスが立ち塞がる。

どう考えても無謀な行為。でも、ガイウスのはとある必殺技がある。

「全てを受け流す。八陣流『不破』！」

ガイウスはその手にあった剣を落とし、エンシェントドラゴンの突撃に対して拳を放った。その拳とエンシェントドラゴンがぶつかった瞬間、ガイウスの後方を逆Ｖの字のように衝撃波が走った。だけど、それだけで終わる。

これにはフィーナもエンシェントドラゴンも目を見開いて驚いている。

ガイウスの使う古武術である防衛の拳である八陣流。その中でも不破はあらゆる威力を受け流す。もちろん、それを極めていればの話だが。ガイウスは防御に関しては拳を使った方が強いというかなり特殊な人物でもある。

そこに驚きながらも動きを止めなかったフィーナが背後からエンシェントドラゴンを切り裂いた。斬り裂いた部分から飛び散った血が一気に凍結する。

『貴様ら！』

エンシェントドラゴンが回転するように身をよじった瞬間、フィラとリークがクリスとガイウスを連れて後ろに下がっている。リークが即席で考え出した攻撃の仕方だ。

「氷の結晶３６。光の名の元にその力を開眼せよ！」

ガイウスを救出しながらもリークは魔法を唱えるのを忘れない。クリスのレベルになると詠唱をなくしてもかなりの威力が出るが、一般人は詠唱をなくせば魔法はほとんど発動できない。

リークの唱えた魔法が力となり、周囲に浮かんだプリズムが光を収束してエンシェントドラゴンの皮膚を焼く。

「大地の塊９９。その力の名の元に、全てを呑み込む力と成せ」

それに応じるようにクリスも魔法を唱える。その瞬間、大地からせり出した槍がエンシェントドラゴンの体を貫いた。

クリスの魔法は相変わらず半端ない。とくに、詠唱を加えたなら。

だけど、相手も相手だ。土の槍で貫かれても、光で焼かれても、そこには傷口がふさがっていくエンシェントドラゴンの姿があった。はっきり言うなら桁違いもいいところだ。桁がかなり違いすぎる。

ただ、オレの目についているのはフィーナが斬り裂いた傷口。そこは回復せず、凍ったまま。エンシェントドラゴンはその体に炎を溜めこんでいるんじゃないのか？　ドラゴンは基本的にそうだと聞くし。

『ぬるい。ぬるいな。そんな攻撃では我の体に傷一つもつかない。さあ、彼らの様にどう殺そうか』

エンシェントドラゴンの視線が向いた先には無残にもひき肉にされた冒険者の人達。クリス達みたいにチームプレイに走らなかったからかあっという間に殺された。

今の言葉を考えると、凍らされたことには気づいていないみたいだな。

いつの間にか獣人族の姿もない。まあ、普通は逃げるだろうな。

『矮小な人間はやはりかみ殺す方がいいか？』

「くっ、どうしようもないのか」

ガイウスが小さくつぶやいた。それにはオレも賛成に近い。まあ、思いついた作戦があることにはある。でも、それはフィーナと、そして、オレの身をとても危険にさらす。とくに、フィーナはもしかしたら死ぬかもしれない。それだけは嫌だ。考えろ。最弱の力しか持たないオレの力でものを考えろ。

「風雪舞うその刹那」

その時、フィーナの声が高らかに響いた。魔法の詠唱の響きじゃない？

「全てを凍らす力の源」

フィーナのオリジンが輝いている。まるで、フィーナの言葉に歓喜しているように。

「時をも統べるその名を今ここに開眼せよ！　我こそは氷の申し子なり！　氷王具現化！」

その言葉が周囲に響いた瞬間、時が止まったような感覚に陥った。何故なら、いつの間にか周囲が氷におおわれているからだ。今まで普通の森の中だったはずなのに、そこには氷がたくさんある。それに右手が触れているが、その氷は全く冷たくない。

『貴様、まさか、魔術が使えるのか！？』

「トキヤの忘れ形見。氷王降臨！」

その言葉と共に周囲の氷が一斉にエンシェントドラゴンに向かって放たれた。それはエンシェントドラゴンの体に突き刺さり氷漬けにしていく。それはまさに魔法とはかけ離れた攻撃に思えた。

エンシェントドラゴンの体のほとんどが氷に埋まる。凍っていないのはオリジンによって切り裂かれた背中の部分だけ。

「これで、終わり！」

フィーナはそう叫び跳び上がった。そして、その部分にオリジンを

突き立てる。エンシェントドラゴンの体を完全に氷が覆い尽くし、そこにいた誰もが勝ったとそう思った瞬間、エンシェントドラゴンの体を覆う氷が砕け散った。

「えっ！」

フィーナの体ぬ向かってエンシェントドラゴンが無造作に腕を振る。そして、フィーナの体はまるでゴミの様に吹き飛んで木に激突した。

「がはっ」

そのままフィーナが動かなくなる。死んだわけじゃないと思う。かすかに胸が動いているのがここからでもわかるから。

だけど、完全にどうしようもならない状況だった。

『さすがの我でも全てを原初の氷に包まれたならかなりまずかったが、魔術が使えるの貴様だけではない。残念だったな。貴様の剣は認められたもの以外を体の内部から凍らせる剣。もう、我にダメージを与えることは出来ない』

そう言ってエンシェントドラゴンが笑みを浮かべた。完全な万事休すのはずなのにオレの思考は落ちついていた。

今、エンシェントドラゴンは何て言った？

残念だった、だ。自分の背中に突き立てられたオリジンを挙げて残念だと言った。つまり、そこがあいつにとっての弱点なのだろう。そして、オリジンはフィーナ以外を内部から凍らせる。多分、魔法が体に作用するのだろう。

クリス達は何もできない。いや、エンシェントドラゴンが睨みつけているから何も動けない。動けば殺されるとわかっているから。もう、この場はエンシェントドラゴンが支配していた。フィーナは動けず、クリス達は睨みつけられ行動できない。

でも、オレはどうだ？

エンシェントドラゴンの意識の外にあるオレなら出来るんじゃないか？

やるしかない。最弱がなんだ。戦闘能力がないのがなんだ。この場にはオレにはオレしかできないことが残っている。死ぬかもしれない。でも、それを恐れて、大切な仲間を見捨てられるか。

クリスがオレの視線に気づいた。そして、目で小さく頷く。

「あなたは、何なのですか？」

『小娘、それを聞いてどうする？』

クリスの質問にエンシェントドラゴンが愉快そうに笑みを浮かべた。

「死ぬ前に聞きたかったのです。フィーナさんは知っているようですが、私達は知らないので」

『そうか。そうだな。なら、武器を捨てろ』

オレはゆっくり立ち上がった。それと同時にみんなが武器を捨てる。

誰もがオレに視線を送って。

『捨てたな。では、話してやろう。我はエンシェントドラゴン。ドラゴンの上に位置し、神に並ぶ至高の存在。人の身で抗ったとを後悔するがいい』

「誰がするかよ！」

オレは叫んでいた。そして、エンシェントドラゴンの背中を蹴りオリジンの柄を握り締める。エンシェントドラゴンは首だけオレの方を向き、そして、目を見開いた。

まずは毒で死んでいないこと。そして、内部から凍らされていないこと。オレはオリジンの柄を握り締め、そのまま体重を乗せてさらに突き刺した。

オリジンが面白いようにめり込む。

『貴様、何故！』

「人間様を舐めるな！」

そのままさらにオリジンを突き刺した。

『ふざけるな！』

エンシェントドラゴンが体を振る。その瞬間、オレは空中に放り出されていた。そして、尻尾が迫る。

回避する時間はなかった。

エンシェントドラゴンの尻尾がオレをかする。助かったように思った瞬間、オレの体は勢いよく地面に叩きつけられていた。かすっただけでこの威力。フィーナはどれだけの恐怖と戦っていたのだろうか。

『死ね！』

凄まじい痛みと共にゆっくり目を開けると、エンシェントドラゴンが口を開いていた。でも、オレの顔には笑みを浮かんでいただろう。

「チェックメイトだ」

痛む体をこらえて言葉を吐き出す。よく昔フィラとやったチェスの最後に言う言葉をエンシェントドラゴンに告げた瞬間、エンシェントドラゴンの背後で氷が舞った。

オレが笑みを浮かべた理由、口元に血で赤くなったフィーナがオリジンに向かって一直線に飛んでいたからだ。そして、オリジンを握り締めて一閃した。そうなのだろう。

エンシェントドラゴンの体が止まる。そして、その体は内部から凍りついていった。そして、エンシェントドラゴンの体が完全に凍りつき、砕け散る。

その光景を綺麗だと思いつつ、オレの意識は闇に落ちていた。

第十一話　最弱の力（後書き）

八陣流について

防御特化の武術。基本的にカウンターが多いものの不破のような究極防御を持つなど極めた場合の効果は極めて高い。ただし、こちらから攻撃することがないため決め手に欠ける。

第十二話　王都に（前書き）

久しぶりの投稿です。新たな未来を求めての調子が良かったのでこういうことになりました。

第十二話　王都に

荒野。

今、オレが見ている光景を表す二文字としてはもっとも最適なものだろう。

焼け野原というのも間違った表現ではない。それほどまでに今のここは何も無かった。いや、何も無いわけじゃない。

荒野の中にポツンと立つ何か。何か、じゃない。女の子だ。青みがかった白い長い髪。まるで、かかとまであるのかと疑ってしまう長い髪。

女の子が泣いている。その側には何本か存在する様々な形の武器。だけど、それが光の粒子となって消え去っていく。

女の子がそれを掴み取るように手を伸ばすが届かない。当たり前だ。相手は光。そんな実体の無いものを掴み取るなんて夢のまた夢。

「止めて！」

少女が泣いている。いや、口を開いていない。だけど、声は聞こえる。

「もう、私の大事な人を奪わないで！」

その声にオレは目を開けていた。その時にようやくあの時の女の子がいた世界が夢なのだとわかった。そして、目の前にはクリスとフ

ィーナの姿。

「クリス？　フィーナ？」

「「レイ！」」

二人の声が重なる。オレはそれを夢見心地で聞いていた。そして、思い出す。オレ達が戦った相手のことを。

「エンシェントドラゴン、エンシェントドラゴンは？」

「私が、倒した、から」

フィーナが瞳の端に涙を作っている。クリスに至っては我慢すらしていない。でも、心配してくれる人がいるって本当にありがたいな。

すると、近くからため息が聞こえた。

「久しぶりに起きたと思えばいきなり女か。羨ましい」

「そっちこそ、モテモテだった、じゃないか。っく」

ガイウスの声に起き上がろうとするが痛みのあまり起き上がれない。だけど、それをこらえて、

「止めておけ。迷惑だ」

その言葉と共に手が払われた。そして、そのまま倒される。

ガイウスって本当は優しいからな。オレが女だったら絶対惚れてる。

「無理はダメです。レイは一週間眠っていましたから」

「一週間、も？」

つまり、あの日から一週間経っているのだろう。あれから何日かは経っているだろうなと思っていたけれど、予想外通り越して想定外だ。

「魔法も効かないし魔術も効かないし、レイが死んだら私はどうすればいいの？　せっかくの初めての人だったのに」

「貴様！　彼女に一体何をした！」

「これってオレの体質が怒られているよな！？　オレが何かしたか！？」

見に覚えもありません。というか、初めての人の意味ってあきらかにオリジンで傷がついても死なないという意味だよな。

まあ、ガイウスからすれば色々と許せないかもしれないが。

「知らん！」

「そんな誇らしげに言われても。ところで、フィラとリークは？」

「お二人なら今買い物に出かけています。これからのこともありますし」

「これから？」

一週間も寝ていたからか状況が全くつかめない。一体、これからどうするつもりなのだろうか。

オレの言葉にクリスが頷いた。

「はい。これから、王都の医者にレイを見せようと思っていました。ですが、起きたなら馬車の必要もありませんよね」

「ですが、さすがに王女がここにいるのは危険ではないかと思います」

ガイウスがクリスに向かって敬語で言う。それにオレも頷いた。

クリスから受けたクエストはすでに終わっている。その結果がフィーナだし、クリスもフィーナと仲良くなったから離れたくはないだろう。

「オレもガイウスに賛成だ」

「レイ」

「今回のクエストは終わっている。確かに、今は連れが倒れたからという理由でここまで残れるけど、そろそろ国王陛下が心配すると思う。だから、一度戻ろう」

「一度？」

クリスが不思議そうに首を傾げた。それに対してオレは頷く。

「そう。国王陛下は尊敬できる人だからクリスが帰らないことで心労を与えたくない。だから、一度国王陛下とじっくり話して。クリスが何をしたいのかを」

このまま新たなクエストを受けるという手段もある。ドラゴン狩りについては理由は後付けで可能だ。フィーナがココロダ山の原因となったか調べるためと言っていい。

だけど、それ以上は駄目だ。

「だから、国王陛下がお許しになったなら、また一緒に旅をしよう」

王都に帰ればクリスは一度戻る。だけど、、オレはまたクリスと一緒に冒険がしたい。クリスやフィーナと一緒にいた期間は短いけれど楽しかったから。

「そう、ですね。お父様にしっかりお話をしないと。わかりました。お二方の言葉を受け入れます。そうと決まれば善は急げですね。すぐに向かいましょう」

「ちょっとは余裕を持った方がいいけどな」

オレは小さく息を吐きながら近くにあった自分の剣を手に取り、

「あれ？　軽くなってる？」

鞘から引き抜いてみた。そこにあったのは新品同様の輝きを持つ片手剣。ただし、その色は若干青みがかっている。

「私が打ち直したの。レイの剣だから全力でやったらすごいのが出

来上がっちゃった」

見た目はただの青みがかった剣かもしれない。だけど、持っているだけでわかる。軽い割にはかなり重い武器であるということを。

オレはその剣を鞘に収めた。

「とりあえず、フィラとリークが帰って来るまで待とう。詳しい話はそれからで」

「「賛成」」

二人の声が重なる。まあ、この二人も同じように言うと思ったけど。

「馬車の予約をして来てみれば、まさか、レイが目を覚ましたとはね。王都戻るのは賛成よ。新しい大口のクエストが近々発表されるらしいから」

「大口のクエストだと」

ガイウスが絶句している。そりゃそうだろう。大口のクエストなんてまず出ない。ドラゴン退治と同じく危険性が極めて高いからだ。それに、大口のクエストは内容がすごいというより依頼者がすごいということにある。

大口のクエストは基本的に上級貴族以上の人が出すものだ。もちろ

ん、クリスのも大口のクエストである。

「まあ、噂よ噂。だけど、冒険者としては見るしかないわ」

「レイ、大口のクエストって？」

この中で唯一そういうことを知らないフィーナが首を傾げてくる。

まあ、普通はわからないだろうな。

オレはどう説明しようか一瞬悩んで小さく頷いた。

「基本的には上級貴族が依頼するクエストで、クエストの中でも達成率が低く、成功した時には莫大な報酬がでるものかな。まあ、基本的には選考でオレみたいな奴やフィラ達みたいな駆け出しは落ちる。ガイウスがいいところ行くんじゃないか？」

「当たり前だ。だが、最終選考には残れない。しかし、フィーナなら可能ではないか？」

確かに、ガイウスですら反応出来ないくらい速いフィーナなら普通に最終選考に残れるだろう。

でも、フィーナは絶対にしないだろうな。

「私は、レイとクリスが一緒じゃないとやらないかな。自分で戦うのではなく、誰かを守るために今は使いたいから」

「そうか。なら、いい」

ガイウスはそう言いながらそっぽを向く。ガイウスって貴族につい

てバカにしなかったら基本的には優しい。
特にオレに対しては難しいクエストをかすめ取るくらいだ。確かに、目標達成は難しいけどさ。
「じゃ、王都に向かうということで。大口のクエストならオレも気になるしな。見るだけはタダだ」
「それを言っていて悲しくなりません？」
「なる」
なるに決まっているだろう。だけど、大口のクエストなんて受けることはまず出来ない。だって、それが団体じゃなければオレでは不可能だ。
「フィラ、馬車はいつ使えるの？」
「明日よ。だから、あんたはちょっと休んでなさい。ただでさえ戦力にならないから」
「ひでぇな」
オレは苦笑を浮かべた。それに対してみんなは笑みを浮かべる。
大口のクエストってどんなものが出ているのかな？

第十三話　道中

いい匂いが周囲に行き渡る。オレはそれを感じながら大きく息を吸い込んだ。ついでに大きく体を伸ばす。

すでに空には星が煌めき周囲を暗闇に染めている。オレ達がこうしていられるのもクリスの作った光球のおかげだ。

「そろそろ出来そうかな？」

「うん。大丈夫だと思うけど、よし。クリス、味見をして」

「わかりました。うん。大丈夫です。これならレイも喜びますよ」

「やった」

フィーナが小さくガッツポーズを取る。それを見ながらクリスは苦笑していた。

ちなみに、ガイウスとリークの二人は眠っている。馬車の中で順番に眠っていたからだ。

ちなみに、フィラだけは近くの木の陰でいじけている。まあ、オレ達が必死で止めたからな。オレとガイウスとリークの三人が。

オレはフィラに近づいた。

「フィラ、そろそろご飯だよ」

「レイは話しかけないで。どうして私にご飯を作らせてくれないのよ」

「だって、フィラがどれだけ味音痴かオレ達はわかっているし、薬草を収穫するように言ったら毒草を収穫したよね？」

フィラは戦闘に関しては凄い働きをする。ガイウスですら攻撃だけなら世界でも通用するかもしれないと言うほどだ。スピードを最大限まで使った加速は本当に速い。ただし、フィーナからすれば遅いらしいけど。

そのフィラの最大の決定が料理と野草の選別だ。特に、薬草と毒草は確実に失敗する。

だから、単独での行動の時によく野草と毒草を間違えていたり、食べていたりもしていた。さらにはフィラの作る料理が凄い。簡単に言うなら食べられない。甘いとか辛いとかではなく、表現のしようがない味が合わさりまずさだけが引きたてられる。

そんな料理を食べたことがあるオレ達は全力で反対した。

だって、三日三晩病院のベッドの上で腹痛のあまりのたうちまわっていたんだぞ。そんなもの食べたくなるわけ無いじゃないか。

「いや、だって、あれはその、えっと、偶然だって」

「偶然？　はあ、わかったわかった。とりあえず、大人しくご飯を食べようよ。みんなと離れていても魔物の危険性もあるしね」

「わかっているわよ。でも、魔物くらいなら私一人でどうにか出来

るわよ。後、あんたの剣があれば」

確かにそうだ。オレの剣があればどうにかなると言うのも少し怖い。

道中に出会った魔物の攻撃を受け止めた際、スパッと切れたのだ。

魔物の腕がスパッと。

切れ味が良すぎる。

「あんたの剣は本当になんなのかしら。私のナイフも加工してくれたらいいのに」

「多分、フィーナがしないかな。でも、オレからすればかなりもったいないものだけどね。でも、フィーナが頑張って鍛えてくれた剣だから大切に使わないと」

「ふーん。ところでさ、レイって誰のことが気になっているの？」

その言葉に僕は首をかしげる。フィラは一体何を聞きたいのだろうか。

「だから、レイは誰のことが好きなの？」

「す、好き！？」

僕は思わず叫んでいた。その言葉にクリストフィーナが振り返るのがわかった。フィラは呆れたようにため息をつく。

「簡単な話よ。ほんの少し前まで女性い比率が著しく高かったのよ。だれかに好意を寄せていてもそれは不思議ではないわ。で、誰のこ

とが好きなの」

「それは」

オレは言葉を詰まらせる。

まあ、そう言う感情が無いわけでもない。これでもオレは普通の男だ。クリスやフィーナに行為は抱いているけど、そう言う感情は未だに、

その時、甲高い音が鳴り響いた。文字で表すなら、キーンという耳が痛くなる音。この音は確か、

「ヘルゲスの、魔笛」

耳を押さえ顔をしかめながら言う。甲高い音だけならいいのだが、ヘルゲスの魔笛には一定時間体内にある魔力回路が正常に動かなくなるという特殊な状態異常がある。もちろん、それはクリスのような魔法使いにとっては本当に天敵だし、フィラのような近接戦闘行う戦士であっても近接戦闘用の身体強化魔法の発動が出来ないため動きは普通に落ちる。

つまり、この場でいつも通りに動けるのはオレ一人。

オレは腰の剣を引き抜く。青みがかった刃が煌めき姿を現した。場所は、

「あっち！」

フィラが指差した先に向かってオレは駆け出した。そして、背丈が

高い草むらに向けて剣を振る。

何かが当たったような感触と共に剣を振り抜いた。

それと同時に甲高い音が無くなり、何かが飛び出してきた。

煌めく何か。体を捻りながら必死に避けようとして左肩に痛みが走った。

相手の鋭い鎌がついた腕に切り裂かれたらしい。相手はプダズタか。

「こんにゃろ」

すかさず右腕を動かしてプダズタの昆虫のような顔を切り裂く。飛び散る体液から傷口を守りながら後ろに下がった。

「レイ！」

フィラがナイフを抜いて駆け寄ってくる。だけど、ヘルゲスの魔笛がないからよくわかるが、囲まれている。

「嘘。魔物がこんなに集団行動をするなんて」

「何が起きた！」

オレがフィラと一緒に後ろに下がるとガイウスとリークが飛び起きていた。

クリスとフィーナはまだ魔笛から立ち直れていない。

「ヘルゲスの魔笛！　すぐさま密集して！　囲まれている！」

オレの言葉と共に周囲から音がする。それはありえない光景の始まりだった。

「嘘でしょ」

フィラの声から言葉が漏れる。それはオレ達も同じだった。冒険者だからこそ習った。

魔物は絶対的に数が少なく、人里離れたような場所にしか住まない。そして、基本的には単独行動。そして、魔物と魔物が協力することは少なく、決して、別種類の魔物は協力しない。

だが、そこにあった光景はフィラの言葉が正しいだろう。

「プダズタにアリオカ、ユゲン、ゼフタ、セルゲス。おいおい。レイ、全てが実は同じ種別はないのか？」

「残念ながら、貴族様の期待には乗れないな」

「貴様、後で八つ裂きにする」

目の前の光景はそういうものだった。

様々な姿をした魔物がオレ達を囲んでいる。こちらに向かって様々な音を立てながら。対するオレ達は未だに魔笛の影響を受けている。

「レイ、私が前に出る」

フィーナがオリジンを引き抜く。だけど、その動きはどこかぎこちない。でも、今はフィーナに頼らないといけないかもしれない。

それでもオレは、

「フィーナは援護を。オレが前に出る」

「貴様、正気か！？」

ガイウスの言葉。それを聞きながらオレは剣を構えた。

「この中で魔法に頼らず戦える人は？」

オレの質問に誰も答えない。口を開いても手を挙げることが出来ないから。ヘルゲスの魔笛は食らえば魔法が使えない。だけど、ヘルゲス自身は草食。魔物というより巨大な昆虫の方が近いかもしれない。

「だったら、オレが前に出る。フィーナとクリスは回復次第、援護を」

「それなら僕も出るよ」

リークが両手で盾を構えながら前に出る。身体強化魔法が無ければ満足に盾も構えられない。

「二人なら、大丈夫じゃないかな？」

「頼りになるよ」

剣を握りしめる。それと同時に魔物が動き出した。だが、その瞬間、何かの鳴き声が響き渡る。

動きを止める魔物。そして、背中を向けて走り出した。

オレ達は呆然とそれを見ることしか出来ない。

「何が、起きたのですか？」

クリスの言葉に視線がオレに集中する。確かに、学校時代はよく図書館にいたけど。

オレは首を傾げた。

「魔物の統率個体がいるかもしれない。今まで考えられていた単独行動をする魔物を束ねる統率個体が。よくわからないけど、今の鳴き声には絶対関係がある」

「そうね。ありえないことだからこそ、ありえない存在がいてもありえないことはない。はぁ、一体どうなっているのよ。わけがわからない」

「報告した方がいいかもしれませんね。お父様にこのことを」

「みんなー、ご飯出来たよ」

フィーナのその言葉にオレ達はずっこけていた。フィーナは不思議そうに首を傾げている。

それを見たオレは思わず笑い出した。それにクリス、フィラと続き

ガイウスやリークも笑い出す。

ただ、フィーナ一人だけが不思議そうにしていた。

「そうだね。ご飯にしよう」

オレは笑いを少しこらえながら言う。その言葉に、その場にいた誰もが頷いていた。

第十三話　道中（後書き）

魔物について

この物語の魔物は大半が大きくなった昆虫の姿をしています。例えば、ヘルゲスはコオロギが大きくなった姿です。いつかＧの魔物も登場させる予定です。

幕間　光と闇と表と裏（前書き）

息抜きに書いて久しぶりに投稿しますが、『新たな未来を求めて』を読んでいる人がいるならそこに出てくる人物が何人か出ています。読んでいない方はそういうキャラがいるんだなと自己完結していただいて結構です。このディバインナイツの物語は星語りがある程度（自分の中では前中高の前編）進んだところで『ディバインナイツ　～光と闇の剣士～』に物語が移って、それが半分くらい進んだところで『ディバインナイツ　～二人の英雄～』に移る予定ですので、長い目で見ていただければと。

ですから、物語は二人の英雄から始まって光と闇の剣士に繋がり、星語りで終わる予定です。逆からスタートしていたのは最弱の主人公を書きたかっただけのなので。

幕間　光と闇と表と裏

まるでカマキリを大きくしたかのような姿。はっきり言うなら気持ち悪いとしか言えない。

そんなカマキリもどきに対して雪羽（せつわ）の持つフィアーランスが貫いた。

「姫路（ひめじ）！　後ろに下がって！」

「私は大丈夫だから！」

そう言いながら向かってきたバッタの大きくした姿の相手に向かって手に持つ黎帝（れいてい）を振り切る。バッタのような何かを吹き飛ばした私はすかさず黎帝を振り上げた。

「光よ」

黎帝の先に光が集まる。その光は巨大な刃となり、私はそれを振り下ろした。バッタのような何かの体を両断する。両断すると同時になんかの体液が噴き出した。

私の顔が引きつる。

「姫路さん！　驚いて突っ立っていないでください！」

私の頬を魔力によって形取られた矢が通り過ぎる。振り返ると、そこにはカマキリのような何かが四体、テオロの放った矢によって貫かれていた。

私は振り返りながら童顔の少年に礼を言う。

「テオロ、ありがとう」

「戦いは終わっていませんよ！」

私はすかさず振り返り、最前線に目を向ける。そこにいるのは白と黒の剣士。

純白の服に身を包んだギルバート君と、漆黒のプレートアーマーを身につけているクロハの二人。それぞれの手には正反対の色の武器が握られている。

ギルバート君の手には漆黒の刀が。クロハの手には純白の刀が。

「敵の数が多い！　これ以上止まっていたら勢いに押されるよ！」

響き渡るギルバート君の声。それに対して私は小さく頷いた。

「わかった、慧海には悪いけど、このまま前に突っ込む！」

「姫路？　正気？」

私が黎帝の先で殴り飛ばしたカマキリを雪羽がしっかりとフィアーランスで貫く。そして、私の横に着地した。雪羽が下がったことでテオロが前に出ている。

「正気も正気。攻撃は最大の防御って言うでしょ。全力前進で相手を砕いて行けばいいのよ」

「はあ。相変わらずの突撃思考。姫路、今は慧海(えかい)君も朱雀ちゃんもいないんだよ。ここで突撃すれば」

「大丈夫。あいつは絶対に来るから」

私の言葉に雪羽が小さくため息をつく。ギルバート君やクロハが前に出ているとはいえ、いくらでも湧き上がってくる敵を相手に押さえていることは難しい。現に、だんだん二人は押されている。いくらコンビネーションが良くても、クロハは重装甲だし、ギルバート君は軽装甲過ぎる。長期決戦には向かない。テオロの体力も気になるし。

「私が黎帝の力を最大限にして突っ込む。運がいいのかわからないけど、黎帝の光刃に対して相手は弱いみたいだから。真正面からぶった切っていけばいい」

「いつから慧海君みたいな思考になったのかな？」

雪羽がまたため息をつくけど、それはちょっと失礼じゃないのかな？

私は黎帝を肩に担いだ。雪羽もフィアーランスを構える。

「準備はいい？」

「いつでも」

見なくてもわかる。雪羽は頷いている。雪羽もわかっているだろう。私の考えを。だって、私達は白百合姫路の表と裏なのだから。

私達が同時に地面を蹴る。タイミングを合わせる必要はない。だっ

て、タイミングを合わせなくてもタイミングは同じになるから。

「ギル！」

クロハが私達に気づいて声を上げる。それに同調するように二人は同時に後ろに下がった。かわりに出てくるのは私達。

黎帝を握り締め。振り上げる。

「光刃よ、斬り裂け！」

「ランス、ツヴァイ！」

私の振り抜いた黎帝と、フィアーランスから放たれた光が、昆虫を巨大化した群れに突き刺さり、吹き飛ばした。

だけど、敵はどんどんやってくる。

「光刃よ」

「ランス」

私達は同じ技を放とうと身構える。何度来ようと倒して見せる。それが私達だから。

「ったく。無茶だけはするなと言ったはずなんだけどな」

その時、声が聞こえた。その声は私達にとって特別で、そして、最強の味方の声。

それと共に舞った。何が？　そんなの決まっている。群がってきている相手の体の一部が細切れになって舞った。

立った一撃。一撃だけで相手の軍勢の約半数の命が消え去った。攻撃はそれだけでは終わらない。一撃が直撃した群れに今度は風の刃と大地の鳴動が襲いかかる。避けられる術はない。

私は黎帝を下ろした。雪羽もフィアーランスを下ろす。それと同時に私達の前に馴染みの深い青年が着地した。

「よっ。遅れて悪かったな」

「遅いわよ」

「ふふっ。はい。遅いですね」

私と雪羽は笑う。嬉しいから。少し、照れ隠しの気持ちも込めて。

「魔物、って言うらしいな」

慧海の言葉が僕達の耳に入ってくる。その名前なら聞いたことはある。確か、慧海達の世界にいるい世界からの侵略者の名前だっけ。

「魔物？　こんな昆虫見たことないわよ」

「そうですよね」

だけど、それは姫路さんと雪羽さんが否定した。僕の中でその存在がわからなくなる。

「じゃあ、この存在は何かな？　僕の世界でも小さい奴はいても、大きい奴はいなかったのに」

「ギルの疑問はもっともだ。というか、オレ達の世界にもいない。まあ、それが大量発生しているみたいだな」

「どこの害虫ですか？」

テオロの口元が引きつっている。その気持ちはわかる。でも、害虫呼ばわりは少し失礼じゃないかなとは思うけど。

「今のところ、この世界を詳しく調べるのは後回しにして、先に襲いかかってくるこいつらの駆除をした方がいいかもしれないな。いつか、Ｇの巨大な存在が出てくるかもしれないし」

その言葉に世界が止まった。いや、世界の時が止まった。これは過言ではなく事実だ。

Ｇの存在。ということは、ゴキ

「それ以上は思ってはダメ思わないであんな太郎さんが大きい存在で出てくるなんて生理的に受け付けないんだけど」

僕の口はクロハによって塞がれていた。その気持ちはわかるけどね。

「まあ、話によれば討伐すれば賞金も出るらしいし、いっちょ頑張

ってみようかって」

僕はクロハの手を剥した。

「それなら賛成かな。僕も、人民が困っているのは見過ごせないし」

「決定だな。じゃ、とりあえず街に向かおうぜ。久しぶりに宿でも止まりますか」

慧海が歩き出す。それを追いかけるように僕達も歩き出した。腰に身に付けた僕の光と闇の象徴を見る。

本当にここがあの場所なら、僕達はもっと悲惨な戦いに巻き込まれていくだろう。でも、戦わないといけない。僕がこの光と闇の伝承を持っている限り。

「久しぶりに宿は、みんなで雑魚寝が出来る場所だったらいいな」

だから僕は、無邪気に笑みを浮かべた。

幕間　光と闇と表と裏（後書き）

幕間のメンバーは少しお休みして次からはレイ達が普通に出ます。
いつ更新するかわかりませんが。

第十四話　要塞都市へ（前書き）

前編の中盤から久しぶりの再開です。

第十四話　要塞都市へ

立ち上る黒煙。燃え盛る街並み。その街を闊歩する黒い姿。そして、シンボルでもあった王城の半分近くが崩れ落ちている。

王都の近くにある要塞都市から見える王都の姿だった。その姿にオレは言葉を失ってしまう。隣にいるガイウスもそうだろう。

「本当の、話だったのか」

ガイウスの口から漏れる言葉。それにオレは何も言えないでいた。何故なら、信じられないからだ。王都にはたくさんの騎士団や冒険者がいた。それなのに、王都は今や黒い影に呑み込まれている。

魔物の集団行動。いや、軍隊行動というべきか。それが王都を埋め尽くしていた。

「避難が間に合ったから良かったものの、少し間違えば一大事じゃないか」

「違う。避難は間に合っていない」

オレは魔物の動きを見ながら答える。魔物はただ、王都に集まっていた。そして、この要塞都市には近づいて来ない。でも、よく見れば時折とある場所から何かが飛び散っているのがわかる。

つまり、あそこに人がいる。

「逃げ遅れた人がいる」

「要塞都市？」

オレの言葉にフィーナが不思議そうに首を傾げた。まあ、不思議になる気持ちはわかる。要塞都市なんて普通じゃありえないから。世界広しと言えど、要塞都市なんて王都のそばにある要塞都市グラザムくらいだろう。

だけど、フィーナの口から出た言葉は違った。

「時代遅れな都市が残っているんだ」

「どういう思考でそうなる？」

近くにいるガイウスが頭を抱えながら尋ねてくる。要塞都市は王都を守る要だ。時代遅れなんてものじゃない。

「だって、要塞都市の壁って一発で破壊出来ない？」

「どうやったら一発で破壊出来るのよ」

フィラが呆れたようにフィーナに向かって言うが、フィラも内心でフィーナなら可能だと思っているだろう。

もちろん、この場にいる僕やリーク、ガイウスもそう思っている。

「そういうもの？」

「そういうものよ。相変わらず、フィーナはすごいわね。要塞都市の姿を知っているから言うけど、並大抵の軍団じゃ攻略出来ないわよ」

要塞都市グラザムは王都のそばにあるだけでなく、世界最大と言われる大きさを誇っている。そのため、駐在する兵や冒険者の数も桁が違う。

まあ、フィーナ一人で何とかなりそうだけど。

「そうなんだ。でも、どうしてクリスは先に向かったの？」

「クリスは王様に会いに行っている。ここから要塞都市までそれほどの距離じゃないから」

むしろ、冒険者なら簡単に走破しなければならない距離だ。オレは背中に担いだ荷物を背負い直した。

「持とうか？」

「あのさ、フィーナ。オレも男だからそんな言葉を言われるのは傷つくんだけど」

「この中で一番軽い荷物を持っているくせに何を言う」

「ガイウス、てめぇ」

殴りたい。殴りたいけど殴りかかったら殴り倒されて殴り倒してく

れるからやだ。

「け、喧嘩はしないようにしましょうよ。僕達は一時とは言え旅の仲間だったんですし」

リークがオレ達の間に入ってきたのでオレはガイウスを睨みつけて舌打ちをして離れることにした。

ガイウスは鼻で笑って離れようとして、フィーナがオリジンを目前に突きつけていた。

「どうしてレイを笑ったの？　事と次第によっては」

「フィーナ、ストップ！」

「こんなところで武器を使うな！」

オレとフィラが同時に飛びかかってオレがオリジンを奪い、フィラがフィーナを拘束する。そして、僕はすかさずオリジンを鞘に収めて周囲を見渡した。

周囲に見回りの兵の姿はない。僕はホッとして息を吐く。

ちなみに、リークやガイウスは顔が青ざめている。殺されかけたからじゃない。これは要塞都市付近にあるとある条例に関係するから。

フィーナは目をパチパチとしてオレを見ている。

「要塞都市周囲で戦闘を行った場合、それが自衛以外の場合だった場合、私達は捕まるの。もちろん、冒険者としての資格も剥奪。武

器は形態していいけど不用意に抜かないで」

「むぅ、レイがバカにされたのに」

「それは俺が悪かった。レイとは昔からよく言い合っていたから癖で」

「癖で言い争いが出来るってすごいよね」

「リークは黙っていなさい」

フィラが呆れたように溜め息をつく。実際に呆れているんだろうな。

「ともかく、オリジンは抜かないように。みんな、留め具をしているでしょ？」

フィラの言葉にフィーナは僕達の剣を見る。

鞘についた留め具は剣自体を固定し滑り落ちないようにするためのものだけど、留め具をしていれば戦闘する意志はないという意味となる。

でも、フィーナのオリジンには留め具がないから。

まあ、原初の剣やら絶氷の剣やら仰々しい名前だからそんなものは無いかもしれないけど。

「留め具は戦わないという意志を示したもの。だから、フィーナはただでさえ目を向けられやすいのに」

「そんなのこの世界のルールだけのもの。私は鞘に入っているだけで十分に戦う意志がないとは思うけど？」

「フィーナなら辻斬りくらい逆に斬り倒しそうだけど」

オレはそういう風に軽い調子で言うけど、フィーナなら実際に斬り倒すだろう。フィーナの実力は完全にこの世界の常識を超越しているから。

「それでも抜いたら駄目よ。辻斬りでも相手が貴族なら身分が低い方が悪いのだから」

「よく考えるもむちゃくちゃな制度だよね」

リークはそう言うが、そんなことは誰でも、クリスですらわかっている。わかっているからこそ僕達は何も言わない。

いくら平民の地位が上がっても、結局は貴族が上なのは変わりはないから。

「つまり、今、ガイウスを斬ったら私が悪いの？」

「そもそも理由もなく斬ることが罪だというのに気づけよ」

「むぅ、レイのためなのに」

確実に僕も捕まるよね。

オレが小さく溜め息をついて空を見上げた。空は青く透き通っている。白い雲に青い空。光り輝く太陽と黒い煙。あれ？　黒い煙？

オレは慌てて周囲を見渡した。確かに黒い煙が立ち上っている。でも、周囲の木々があるからよく見えない。

オレは慌ててポケットから鉤爪がついたロープを取り出し近くの木の太い枝に絡ませた。そして、すかさず助走してロープを使いながら一気に駆け上がり、葉の間を抜け出した。

そして、木の上から周囲を見渡す。

そこには、要塞都市から立ち上る、いや、要塞都市の向こう側にある王都から立ち上る黒煙だった。

「レイ、どうかしたの？」

フィーナがいつの間にかオレの隣にまでやって来る。それをオレは驚いていた。

「レイ？」

「あ、うん」

フィーナの言葉に我に戻ってオレは黒煙が上がっている方向を指さした。そこには、黒煙を上げる王都の姿がある。

フィーナは目を細めて小さく頷いた。

「廃墟ね」

「廃墟？」

オレは目には自信はあるがそこまでは見えなかった。

フィーナがゆっくりと、だけど、確かに頷く。

「崩れた城が見える。所々から黒煙は上がっているし、中を、あれは、魔物かな？　それが歩いている」

「フィーナ、降りるぞ」

オレはそう言って木から降りた。対するフィーナは飛び降りる。相変わらずすごい身体能力だよな。

オレが地面まで降りるとみんなが不思議そうに、むしろ、心配してオレ達を見ている。

「王都から黒煙が上がっている。どうしてかわからないけど、王都で何かあったのだと思う」

「それは、本当か？」

ガイウスが詰め寄って尋ねてくる。オレやフィラ、リークは実家が王都じゃないけど、ガイウスは実家が王都にある。心配するのは当たり前だ。

オレはガイウスの言葉に頷いた。

「事実だ。信じたくはないだろうけど、オレは王都から黒煙が上がっているのを確認して、フィーナは王都に魔物がいるのを確認した」

「そん、な」

ガイウスがその場に座り込む。だが、オレはガイウスの手を掴んで無理やり立ち上がらせた。

「今は要塞都市に向かうぞ。王都がもし、魔物の群れに蹂躙されたのだとしたら、ここも危ない。一刻も早く要塞都市に向かい、情報を集めよう。倒れるのはそれからだろう。貴族様」

「貴様、後で覚えておけよ」

「それくらいの力があるなら大丈夫だな」

ガイウスが立ち上がる。それに対してオレは笑みを浮かべた。

「行こう、要塞都市グラザムへ」

第十五話　白の剣士

王都の陥落。それはオレ達王都の冒険者養成学校出身の者達からしてみればかなり驚く内容でもあった。

王都には基本的に近衛騎士団がいる。そして、いくつかの騎士団も存在しているし、冒険者達のグループもある。並の大軍なら簡単に倒せそうなくらいの戦力を持っている。

だけど、王都が陥落した可能性がある。信じられないけど信じるしかない。

「とりあえず、これからどうするの？」

要塞都市に向かっていたオレ達にフィラは尋ねた。

「要塞都市と言っても王都から逃げてきた人達で溢れかえるわよ。そうなれば、入るのは難しいのじゃない？」

「そういう時にガイウスの名前があるんじゃない？」

「最初から他人任せとは喧嘩を売っているな、レイ」

オレは軽く肩をすくめて先頭をひたすら歩く。問題として、王都が陥落したのだとしたらどうして避難してくる人とすれ違わないのだろうか。

その点は少し気になるけど、今は要塞都市に向かえば解決するはずだ。

「クリスは大丈夫かな？」
隣にいるフィーナが不安そうに声を出す。確かに心配だけど、クリスはおそらく要塞都市にいるだろう。
「ストップ」
その時、フィーナがオレを手で止めた。オレはそれに耳をすませる。微かに聞こえるのは足音か？
オレ達は全員が端によって草陰に入りながら耳をすませる。
うん。冒険者としての癖がこんなところで簡単に出て来る。
足音から考えて、どこかの軍隊だろう。でも、かなりの数だ。一体どこに向かうと言うのだろうか。
「大丈夫。練度は低い」
そう言ったのはフィーナだ。続いてフィラが立ち上がる。立ち上がってそして、フィラは留め具を外した。オレ達も留め具を外して立ち上がる。
「先頭は私が行くわ。次にガイウス、リーク、レイ、フィーナの順でお願い」
「わかった」
すぐさま隊列というか一直線になって歩き出す。組み方としては全

く間違っていないけど、やっぱりオレは守られる側か。

響く足音はだんだん近くなってきて木々に隠れてはいるが相手の姿を見ることは出来るようになっていた。

真っ黒な鎧で身を包んだ兵団。近衛騎士団だ。どうして近衛騎士団がこっちに来ているのだろうか。

「あの鎧は？」

フィーナがオレにだけ聞こえるような声で尋ねてくる。だから、オレは頷いて言葉を返した。

「近衛騎士団。王族を守るための騎士団だけど、避難している最中なのか？」

「王がいても民がいなければ国は回らないのに」

フィーナがポツリと呟く。多分、オレに聞かせるつもりはなかったのだろうけど、その言葉に関してはオレも同意見だ。

次第に近づいてきた足音は完全に姿を現す。道の真ん中を歩く三列になった近衛騎士団。オレ達は端によって歩く。

こうしていれば普通は何も起きることはない。そう、普通なら。

近衛騎士団の列がかなり過ぎたころだろうか。大きな馬車が現れた。人の動きに同調するように歩く大きく豪華な馬車。嫌な予感がする。

その馬車から視線を感じたのだ。正確には後ろにいるフィーナに向

かって。

馬車から誰かが乗り出し馬車の横にいた近衛騎士団の一人に向かって何かを言う。多分、伝令に話を伝えられ近衛騎士団の兵は声を張り上げた。

「進軍止め！」

その言葉に列の前後から同じような声が上がる。そして、近衛騎士団の動きが止まった。

オレ達も動きを止めている。フィーナにいたっては完全にいつでもオリジンの柄に手を置ける状況だし。

馬車からまた伝令が近衛騎士団の人に何かを告げる。そして、頷いたと思った瞬間にオレ達の方を向いた。

「そこの冒険者の群れ。すぐさま女を差し出せ。これは国王陛下のご命令だ」

「国王陛下の？」

オレが訝しむ言葉を上げると馬車のドアが開いた。そこから現れたのは国王陛下じゃない。王位継承権第一位のレクス王子だ。

「僕を疑ったな。お前は何者だ？　僕より偉いのか？　偉くないくせに口答えをするな平民が」

レクス王子が笑みを浮かべてフィーナとフィラの二人を見る。

「平民ならこの国王陛下の命令に従うがいい」

「ならば質問させていただきます。レクス陛下はいつ国王陛下となられたのか。王都を離れていた私達にはわからぬことゆえどうかご説明を」

唯一臣下の礼を取って片膝をついたガイウスがレクス王子に尋ねる。レクス王子はガイウスをまるで腐ったゴミを見るかのように見つめて小さく笑みを浮かべた。

「糞爺が死んだからだよ。王典に従って僕が王になった。何か問題があるか？」

「いえ、そうだったなら何も問題はありません」

「なら、早く女を渡せよ」

その言葉にオレ達が固まる。いや、固まらされる。さすがに国王陛下を名乗る輩からそんな言葉が聞けるとは思わなかったからだ。

レクス王子はオレ達をゴミでも見るかのように見下していた。

「平民共、僕の命令が聞けないというのか。この国は僕のものだぞ。つまり、この国に住む平民は僕のものだ。さあ、お前達なんかよりも女を有効利用」

その瞬間、オレの剣が鞘から抜かれた。抜いたんじゃない。抜かれたのだ。そして、何か風が舞った瞬間、馬車と馬を繋いでいた木がものの見事に斬られていた。

ちなみに、その瞬間には剣は鞘に収まっている。
レクス王子はそのまま対面の壁に頭をぶつけていた。
「「ざまあみろ」」
オレとフィラの言葉が同時に重なる。
「な、何が起きた。責任者を呼べ！」
レクス王子が怒りの形相で周囲を見渡す。それを見たフィーナがクスッと笑みを浮かべた。その音はレクス王子に聞こえたらしく、レクス王子の顔が歪む。
「勘違いの王様。全てが自分のものだと思い込み殺された王様。王様の何が悪かったのか。それは王様の存在そのものです。本当笑える」
その瞬間、オレ達から完全に血の気が引いていた。何故なら、完全にレクス王子をバカにした言葉だったからだ。
だが、フィーナは平然と口にする。
「あなたのところなんてお断り。王様であることしか取り柄のないあなたなんて人としての価値は一つもないから」
オレは思わずガイウスを見て、そこにいないことに気づいた。まあ、ガイウスは貴族だから王様に目をつけられたらマズいけど、今の状況の方がかなりマズいような。

「こ、ここここ、この女！　近衛騎士団！　あいつらを捕まえろ。抵抗するなら殺しても」

「王たるもの、民に無茶を押しつけない」

その瞬間、漆黒の斬撃が屋根をねじ曲げで吹き飛ばした。

「騎士団たるもの、民を守ることを優先せよ」

そして、純白の斬撃が馬車自体を傷つけないように真っ二つにする。

いつの間にかオレの前に純白の長袖長ズボンに身を包んだ少年と漆黒のプレートアーマーに身を包んだ少女の姿があった。

お互いの持つ刀は服装を逆にした色の刀が握られている。

「民を守らない国王なんて、ただの飾りだと僕は思うね」

「ふ、不敬だ！　僕を何だと思っている！？」

「裸の王様。あっ、悪い意味でね。ただの最悪の人間ということだよ」

「貴様！」

レクス王子が逆上する。近衛騎士団が武器を構えた瞬間、甲高い音が鳴り響いた。

正確には近衛騎士団の鎧が割れる音が。

あまりのことにオレ達は固まってしまう。この二人はほんの一瞬で武器を向けた総勢２８にも及ぶ近衛騎士団の鎧を真っ二つに割ったのだ。

しかも、中にいる人を傷つけないで。

「き、貴様、お、王にこんなことをして」

「奇遇だね。僕も王と呼ばれる存在なんだよ。だからね、王と王の格差は同じ。剣を取りなよ。今ここで、僕が君の首を取ってあげる」

「し、進軍開始！　早くこいつから逃げるぞ！」

鎧を割られていない近衛騎士団員が慌てて馬車を担ぎ上げ、割られた近衛騎士団員がすぐさま鎧を回収して走り出す。だけど、動きが早くなるわけではなくゆっくり、来た時より早いペースで動き出した。

オレ達は呆然と少年と少女を見つめている。すると、少年がオレに振り返った。

「危ないところだったね。怪我はないかい？」

「ありがとう。助かった。まさか、自称国王があんな暴挙に出るなんて」

「自称国王？」

オレがそう言うと少年はキョトンとして、そして、笑い出した。

「ギル」

少年の後ろにいる少女が少年を諌める。

「ごめんごめん。君も面白いことを言うよね。僕はギルバート。ギルバート・F・ルーンバイト。君は？」

「レイ・ラクナール」

オレとギルバートは同時に握手をする。

この時のギルバートとの出会いがこれからの運命を大きく変えることになるなんて、その時のオレには何もわからなかった。

第十五話　白の剣士（後書き）

ギルバートが登場しましたが、あまり活躍するわけではありません。基本的には主要メンバー六人を中心に今は話が進んでいきます。ギルバート達は今のところサブキャラです。

第十六話　魔物の進撃

「なるほど、王都が落ちたかもしれないからか」

オレ達は旅の仲間に一時だけギルバートとギルバートと一緒にいた少女であるクロハの二人と共に要塞都市に向かって走っていた。

どうやらギルバートは王都に向かっている最中でオレ達を見つけて助けてくれたらしい。

「まだ確約はしていないけど。オレ達だって王都が落ちただなんて信じられていない。今は要塞都市に向かわないと」

「要塞都市なら王都の様子が見れるんだね？」

「要塞都市から王都は見える。だから、王都がどんな状態なのかわかりやすいはずだから」

「なるほど」

ギルバートは納得したように頷いて鞘に収まっていた黒の刀を抜き放った瞬間、茂みから飛び出したプタズタが両断されていた。

先頭にいたフィラが足を止めようとするけど同じように先頭にいたクロハがフィラの手を掴んで走らす。

「ここで止まらない方がいい」

クロハも白い刀を抜き放つ。それと同時に道を塞ぐようにプタズタ

の群れが前を塞いだ。

「囲まれているから。白の斬撃！」

クロハが声を上げた瞬間、プタズタの頭部が空を待った。そこにクロハが飛び込んで黒のプレートアーマーでプタズタの死体を弾き飛ばしていく。

背後を振り向けばやはりプタズタの群れ。フィーナがオリジンの柄に手を置く。

「こんなところにまで魔物が」

僕は後ろを振り向きつつ剣を抜いて肩に担いだ。そうした方が走りやすい。

要塞都市が近いというのに魔物がいるということは魔物が進軍しているということだ。どうりで近衛騎士団が自称国王を守っているわけね。

「レイ、都市まで後どれくらいかな？」

「大体１０分くらい」

「そんなに近くまで」

ギルバートは驚きながらも黒い刀を振る。すると、黒い刀は直線上にいたプタズタの体を握り潰すかのように捻り潰した。

どういう原理で起きているかわからないけど、あれがフィーナの持

つオリジンとよく似たものであるとはわかる。

「一体一体の戦力は低くても、やはり数が多いね。こういう時に慧海がいてくれたら」

「エカイ？」

「うん。僕の旅の仲間にして親友で、戦場では一番頼りになる男。数の差がある場合は慧海一人がいてくれればかなり楽になるんだけど」

ギルバートはそう言いながら振り返る。それにオレも振り返った。そこには長い足を使って跳躍するユゲンの姿があった。ユゲンは跳躍によって相手を踏み潰し、体液を吸う。もちろん、あんな大きさに体液を座れたら一瞬で死ぬだろう。

問題は、ユゲンがプタズタと共に行動しているところだ。

「相手は敵の敵は味方って根性だよな」

「なるほど。どうりで巨大カマキリと超巨大ノミが協力しているわけだ。興味深いね」

「興味深いじゃないからな！　ユゲンは足が速い。追いつかれたら」

「フラッシュアロー！」

その瞬間、ギルバートの言葉と共にいくつもの光の矢がユゲンの大軍及びプタズタの大軍を貫いた。

魔物の群れの中で魔物の血が飛び散る。
それに群がるように様々な魔物が飛びかかっていた。もちろん、共食いなんて関係ない。
「何つう威力」
「クロハの方が威力は高いよ。僕は魔術は苦手だからね」
「魔術？」
オレが首を傾げた瞬間に近くの茂みで音が鳴った。オレはすかさず肩に担いだ剣を振り下ろそうとして、茂みから現れた何かとぶつかった。
オレはその場に倒れてしまう。
「レイ！」
フィーナの声にオレはぶつかった何かを見た。そこにいたのは女の子。ただし、背中に巨大な蒼い斧を背負った髪の短い女の子だ。
「君は」
女の子が微かに怯えて背中の斧を掴み、そして、背後に向かって一閃した。
轟音。

いや、そんなレベルじゃないかもしれない。爆発は一瞬にして森を吹き飛ばし、森の中にチラッと見えたプタズタの群れを蹴散らしていた。

「メリル、無事だったかい？」

ギルバートが女の子に駆け寄る。メリルと呼ばれた少女が頷く。

「ギルバートとクロハこそ。姫路は？」

「多分、王都。僕達はその王都が見える要塞都市に向かっているよ」

「要塞都市には行かない方がいい」

メリルがオレの体を掴むと無理やり立ち上がらせる。もの凄い力に引っ張られて立ち上がってからも体勢を崩し、フィーナに受け止められる。

もちろん、オレ達の顔は赤くなった。

「要塞都市に魔物の大軍が向かっている。量からして攻め入れば落ちるのは時間の問題」

「メリルの力でも？」

「統率個体にエンシェントドラゴンがいた。さすがに、今の私でエンシェントドラゴン五体は辛い」

その言葉にオレはフィーナの顔を見た。

エンシェントドラゴンはオレが出会った中でも最も強かった相手。
そんな相手が魔物を統率しているなんて信じられない。
だけど、要塞都市にはたくさんの人がいるはずだ。そうなればたくさんの人が死ぬ。
フィーナも同じことを思ったらしく頷いてくれる。
「全く。レイ、フィーナ、あなた達は二人の世界を作らないでくれる？　置いていくわよ」
フィラが呆れたように溜め息をついて歩き出す。その後ろをリークとガイウスが続く。
どうやらオレ達の考えは完全に同じらしい。
オレはそれに苦笑しながらも歩き出した。
「待って」
だけど、ギルバートの声によってみんなの足が止まる。
「エンシェントドラゴン相手では君達は辛いよ。特にレイは無理だと思う。これから行こうとしているのはただの自殺行為」
「自殺行為でも何でも、オレ達は行くさ」
オレは振り返って笑みを浮かべながら答える。
「そうですね。要塞都市にはたくさんの人がいます。僕達も防衛に

参加しないと」

「それに、私達は冒険者よ。国から守ってもらっているのに国を守らない方がおかしいわ」

「そうだな。それに俺は貴族でもある。貴族の役目は民を管理し養うこと。ならば、少しは本気を出してもいいだろう」

確かに死ぬかもしれない。自殺行為かもしれない。逃げ出したいという気持ちはある。

名声のために戦うのでも報酬のために戦うのでもない。オレ達はただ、自己満足のために戦う。

「ギルバート。確かにあなたの言うことは正しい。だけど、それが全てで世界が動くわけじゃない。王のあなたは自分の身が大切かもしれないけど、私達は守りたいから戦うの」

フィーナの言葉にギルバートは降参という風に両手を上げた。そして、小さく笑みを浮かべる。

「クロハ、シュナイトフェザーを返してもらってもいいかな？」

「はい」

クロハが白の刀を鞘ごとギルバートに渡した。ギルバートはそれを受け取って腰に身につける。

「クロハとメリルは追いかけてくる魔物をあしらいながら追いかけてくれる？　僕は彼らについて行くよ」

「エンシェントドラゴンには気をつけて」

「ありがとう、メリル」

ギルバートは歩き出す。一歩踏み出した瞬間にギルバートの気配が変わっているのがわかった。まるで、ギルバートが王である姿を体現したかのように。

思わず片膝をつきそうになる。ガイウスにいたっては片膝をついて臣下の礼を取っていた。

「僕は王であると共に一人の騎士だ。騎士は民を守るもの。だから、僕も戦うよ。行こう。要塞都市に」

「ギルバートは戦えるのか？」

オレは笑みを浮かべながら疑問を口にする。だが、答えたのはフィーナだった。

「ギルバートは強いよ。多分、私の次くらいに」

「おや、僕はかなり強い自信があるけど？」

「あなたの強さは知っているから。伝承を紡ぐ者」

フィーナの言葉にギルバートは微かに目を見開いた。そして、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「さすがは初源の騎士。僕のことを知っているんだね」

「ええ。レイ、彼の力は大丈夫」

「何か会話が気になるけど今はいいか」

オレは頭をかいて走り出す。それと同時にみんなも走り出した。

もちろん、一番遅いオレに合わせてみんなは走ってくれる。

「そろそろ森を抜けるな」

ガイウスの言葉と共にオレ達は開けた大地に出た。前にあるのは巨大な壁によって都市自体が要塞となった要塞都市グラザム。

そのグラザムに攻め入ろうとする黒い大軍、いや、魔物の群れ。その魔物の中には確かにあのエンシェントドラゴンを彷彿とさせるような姿のドラゴンがいた。

対する要塞都市を守る軍勢は半分くらいにしか満たない。エンシェントドラゴン相手には数が不足すぎる。

「作戦はどうする？」

フィーナがオレに話しかけてくる。この状況ではフィーナとギルバート二人を頼りにしないと駄目だから、

「フィーナとギルバートは最大技をいきなり放って。それからオレ達は要塞都市を守る軍勢と合流する」

そこからが本当の戦いとなる。

すると、フィーナとギルバートがほんの一瞬で前に出た。そして、フィーナはオリジンを、ギルバートは半分が黒、半分が白の剣を握っている。

「「我が名において命じる」」

二人の声が重なった。

フィーナはオリジンの刃を地面につけ、ギルバートは剣を振り上げている。

「始まりから存在する原初の氷よ。その身をここに現し全てを砕く力を見せよ」

「伝承の狭間において存在する力。その力をこの地この時に具現せよ」

フィーナとギルバートが高らかに声を上げる。

「その名をここに、今、呼び出す！」

「全てを断ち切る断絶の刃！」

そして、フィーナが飛び上がりながら地面をえぐるようにオリジンを振り上げた。対するギルバートは剣を振り下ろす。

「オリジン！！」

「シュナイデン！！」

その瞬間、オレ達は信じられないものを見た。

オリジンに斬られた地面から氷が出現し、地面を砕きながら華を咲かせつつ突き進み魔物の群れに直撃した瞬間、それはさらに巨大な氷の華と化した。

氷の華には大量の魔物が貫かれ、そこには貫かれたエンシェントドラゴンの姿すらある。だが、エンシェントドラゴンはまだ生きていた。

対するギルバートの方は一瞬だった。

斬撃が地面を砕きながら魔物の群れを通り過ぎた瞬間、その周囲にいた魔物が捻れて潰れたのだ。もちろん、斬撃によって斬られた魔物はエンシェントドラゴンだろうが何だろうかスパッとズレている。

これにはエンシェントドラゴンすら生きていない。

フィーナとギルバートは同時に武器を鞘に収めた。

「じゃ、行こうか」

爽やかな笑みを浮かべるギルバートにオレ達は頷くことしか出来なかった。

第十六話　魔物の進撃（後書き）

ギルバート・Ｆ・ルーンバイト　１７歳
１６３ｃｍ　５４ｋｍ
武器：シュナイトフェザー　ラファルトフェザー
ポジション：フロント
得意魔術属性：光

第十七話　統率固体

プダズタの鎌を剣で受け止める。受け止めると言っても切れ味がかなり高いため鎌を簡単に切断するけど。そのままオレは地面を踏みしめて回転しながらプダズタの頭部に剣を突き刺した。

まるで豆腐を裂くような感覚で断ち切り、すかさず剣を跳ね上げる。ちょうどそこにいたユゲンの体を断ち切ってオレは後ろに下がった。

「数が多い」

一歩前に踏み出しながらオレは小さく呟く。

フィーナとギルバートの同時大技によってかなりの数を削ったもののそれでも魔物の数はかなりの数字が残っている。

突き刺す。切り払う。薙ぎ払う。断ち切る。

様々な動きを駆使して魔物を倒していくけど、休みのない怒涛の攻撃にだんだん後ろに下がってしまう。

「くっ」

プダズタの鎌をギリギリで回避した瞬間、何かが横から高速で飛びかかってきた。避ける間もなくその突撃を受けてオレの体は吹き飛ばされる。

「レイ！」

吹き飛ばされた瞬間にフィラが吹き飛ばしてきた何かをメイスで叩き割ってオレの近くまで下がる。

「大丈夫？」

「何とか。みんなは？」

「リークとガイウスは一緒に戦ってる。二人は相性がいいから」

ガイウスは一撃が極めて強力だが隙は大きい。リークは一撃が弱いが防御に関しては盾を持つため強い。上手く組み合わせたら確かに強い。

「レイは弱いから気をつけないと」

「弱いけど」

立ち上がりながらフィラの横から飛びかかったプダズタの両腕の鎌を斬り飛ばし、返す刃でプダズタの顔面を断ち切った。

「魔物相手なら戦える」

魔物の戦闘能力は成人男性で四分の一。もちろん、魔法を使っての話にはなるがオレで換算したならちょうど同じくらい。

だったら、技術で稼げばどうにかなる。

オレはぬめぬめして地面を滑る気持ち悪いアリオカの頭部に剣を突き刺した。

アリオカは槍を放ってくるので、気をつけていないとそれでやられやすい。

すかさず突き刺して剣を真上に上げてユゲンを迎撃する。地上と空のどちらも気をつけないといけないのが辛い。

魔物の大半がプダズタだから戦闘能力も普通に高いし。

「やっぱり、レイは頼りになるわね」

「そうかな？」

フィラが魔物を三体倒す間に一体くらいしか倒せないのに？

「後ろにいてれば頼りになるということよ」

「それはありがたいね」

剣を握りしめながら飛びかかってきたユゲンに向かって一閃する。ユゲンは真っ二つに断ち切られ後ろに転がって行く。

だけど、その瞬間にはプダズタが鎌を振るっていた。とっさに後ろに下がるがプダズタの鎌が僕のわき腹を浅く裂いた。

「っつ」

足に力を入れて踏み出して剣をプダズタに突き刺す。そして、抜いた。

わき腹の傷は浅いけどぱっくりいっている。戦闘出来るような傷じ

ゃない。

「レイは後ろに下がって！」

フィラはメイスからナイフに持ち替えて怒涛の勢いで切り裂いていく。

フィラもそう言っている。だが、だからと言って下がれるような状況じゃない。

オレは痛みをこらえて前に踏み出した。

「時の針１０３。時を刻み込み、全てを断絶せよ」

その言葉と共に前方にいた魔物の大半が真っ二つにズレて血を吹き出した。

オレは慌てて振り返る。そこには数は少ないが近衛騎士団に囲まれたクリスの姿があった。

「レイ！　無事ですか？」

「大丈夫。何とか」

傷口を押さえながら後ろに下がる。すると、クリスはオレに駆け寄って傷口に杖を当てた。

「水の生命１０７。傷を癒やし、安らぎを与えよ」

傷口が一瞬で閉じる。相変わらずクリスの魔法の技術はかなり高い。

高難易度の三桁番号の魔法を軽々と操るなんて。

クリスはホッとしたように息を吐いて杖を離した。

「今は戦力に限りがあります。戦ってくれますか？」

「クリスの言うままに」

オレとクリスは笑みを浮かべ合う。そして、オレは前に向かって踏み出した。

後ろに下がったフィラの代わりに前に出て剣を一閃する。この剣はただ振り回しているだけでも強い。援護が来た上に、前方の魔物が消え去った以上、後は乗り越えてくる魔物を倒しておけばいい。

その瞬間、風が舞った。いや、違う。フィーナが駆けたのだ。その手にはオリジンと氷の剣が握られている。

オリジンが横一閃され、魔物が凍りつく。凍りついたと思えば氷の剣が振られ、凍りついた魔物が氷の断片となって砕け散って吹き飛ばされた。しかも、吹き飛んだ断片は氷の凶器となって魔物の群れに突き刺さって血を散らす。

うん。クリスを上回る凶悪っぷりだ。

フィーナは小さく息を吐いてオレの隣にまで下がってきた。

「レイ、大丈夫？」

「フィーナこそ、大丈夫？」

「私は平気。相手はまだ弱いから」

その言葉と共にフィーナが振り返りながらオリジンを一閃する。ただ、それは魔物を斬るためじゃない。その一閃大量の氷の槍が出来上がっていた。そして、次の一閃がその槍を放つ。

槍は的確に魔物を貫いていた。

「やりますね。炎の叫び１０２。全てを貫く槍を今ここに！」

クリスも大量の氷の槍を放つ。それはフィーナが倒し損ねた魔物を全て倒した。

なんというか、この二人がいればオレなんて必要ないような気もするけど。

「クリスこそ。魔法師としては惜しい腕を持っているよ」

フィーナが地面をかける。オレもそこに追随しようとして、

『ダメ』

頭の中に声が響いた。思わず頭を押さえてその場に膝をついてしまう。

一体、今何が。

『言ったらダメ』

その言葉は女の子の声。優しく、寂しそうで、それは、要塞都市の方角から聞こえてくる。

「レイ？　レイ！？」

クリスの声が耳に響く。オレは奥歯を噛み締めて立ち上がった。大丈夫だ。まだ、戦えるから。

「ダメだよ。君は、後の君の相棒の声には従わないと」

オレに向かってきていた二人の声が聞こえる。その声にオレは顔を上げた。

そこにいるのは笑みを浮かべた少年。ただ、気配があの少年に似ている。エンシェントドラゴンが化けた姿の少年に。

それよりも、いつの間にこのような場所にいるんだ？

「さもないと、ここで死ぬよ？」

その瞬間は見えていなかった。突き飛ばされたと思った瞬間に何かの突風が舞う。顔を上げたそこには宙を舞うフィーナの姿があった。フィーナがオレの前に落ちて頭から血を流す。

「フィーナ！」

オレは手を伸ばしてフィーアに駆け寄ろうとした。だけど、オレの前を少年が塞ぐ。

「ようやく見つけたよ」

少年の顔に笑みが浮かぶ。

「『星語りの騎士』」

「レイ！」

ギルバートの声にオレは後ろに下がった。そこに神速の速度を持ってギルバートが少年に突撃する。だが、少年の腕はギルバートの持つ白の刀を受け止めていた。

「シュナイトフェザーか。この世界の神剣ではなかったと記憶しているんだけどね」

「ああそうだ。僕こそ驚いているよ。どうしてお前がこの世界にいるのかも。お前は僕がこの手で倒したはずだ！！」

「おやおや。君は別の僕からの説明を忘れたのかな？　僕を倒すなんて人間には百年いや、後三年くらいは早いよ」

少年が腕に力を込める寸前でギルバートが後ろに下がる。そして、ギルバートは両手に持つ刀を一つの剣とした。

「ならば、この場でもう一度お前を倒す」

「おや？　いいのかい？　僕は要塞都市を背後にして戦うよ」

その言葉にギルバートが顔をゆがめる。ギルバートの大技はどうやら背後に都市があえればそれも巻き込むらしい。

オレは剣を握り締め少年に向かって構えた。
すでにフィラとクリスの二人や近衛騎士団も少年を囲むように布陣している。
だが、そんな中でも少年は笑みを浮かべていた。
「君達は僕に抗おうというのか。まあ、いい。ギルバート。君が一番、僕が本気を出したらどうなるかわかっているんじゃないかな？
それに、ここに善知鳥慧海はいない。白百合姫路もいない。たった一人で僕を食い止められるとでも」
「思っていないよ。でもね、僕は食い止めないといけない。お前を動かしていればこの地が大変なことになる。僕は王として、騎士として、お前を命に代えても倒す」
「なるほど。そういうことか。興ざめだよ」
その瞬間、その瞬間、何かの遠吠えが響き渡った。それと共に要塞都市に向かって侵攻していたはずの魔物が動きを止めて身を翻して戻りだす。それをオレ達は呆然と見ていた。
「今回は君に免じて引いてあげるよ。でも、次はこうはいかない。次に会うのは多分」
少年が笑みを浮かべる。
「人と魔物の最終戦争の時かな？」
そして、少年の姿がその場から消えた。

ギルバートは小さく舌打ちをして白黒の剣を鞘に収めた。

「逃げられた」

「ギルバート」

オレはギルバートに駆け寄る。クリスがフィーナに駆け寄っているからフィーナは大丈夫だろう。

「今の相手は」

「僕の宿敵。あいつが、魔物の統率固体だ」

第十八話　要塞都市グラザム

立ち上る黒煙。燃え盛る街並み。その街を闊歩する黒い姿。そして、シンボルでもあった王城の半分近くが崩れ落ちている。

王都の近くにある要塞都市から見える王都の姿だった。その姿にオレは言葉を失ってしまう。隣にいるガイウスもそうだろう。

「本当の、話だったのか」

ガイウスの口から漏れる言葉。それにオレは何も言えないでいた。何故なら、信じられないからだ。王都にはたくさんの騎士団や冒険者がいた。それなのに、王都は今や黒い影に呑み込まれている。

魔物の集団行動。いや、軍隊行動というべきか。それが王都を埋め尽くしていた。

「避難が間に合ったから良かったものの、少し間違えば一大事じゃないか」

「違う。避難は間に合っていない」

オレは魔物の動きを見ながら答える。魔物はただ、王都に集まっていた。そして、この要塞都市には近づいて来ない。でも、よく見れば時折とある場所から何かが飛び散っているのがわかる。

つまり、あそこに人がいる。

「逃げ遅れた人がいる」

「どこにだ？」

ガイウスの言葉にオレはその場所を指差した。

「どこにだ？」

ガイウスは目を細めながらもう一度尋ねてきた。どうやらガイウスにはわからないらしい。まあ、オレはかなり視力がいいからかもしれないが。

「確かにいるね」

その言葉にオレ達は振り返った。そこにはギルバートの姿がある。

「あそこには慧海がいる。レイはよく見えたね」

「それより、フィーナは」

クリスが治療にあたったとは言えかなり深いダメージを受けて意識を失っていた。大丈夫だとは思うけど心配なことには心配だ。

フィーナはオレを守るためにやられたのだから。

「一命は取り留めた」

「一命は」

絶句してしまう。まさか、そんなにも酷い怪我とは思わなかったから。オレは拳を握り締める。

そして、俯いていた顔を上げて歩き出そうとした瞬間、ガイウスに足を引っかけられてその場に転んだ。

「何しやがる！？」

すかさず起き上がってガイウスに詰め寄る。対するガイウスは呆れた表情でオレを見ていた。

「先ほどの二の舞になりたいのか？　お前がどうしてここにいるか考えてみろ」

その言葉オレは俯いた。それは少し前の出来事にまで遡る。

「フィーナは、フィーナは大丈夫なんですか！？」

オレはフィーナの容態を見た医者に詰め寄った。フィーナはベッドで寝ておりクリスが必死に治癒の魔法をかけている。

「落ち着きなさい。ここには彼女以外にも患者がいるのだぞ」

「だけど」

落ち着けるわけがない。フィーナは、オレのせいで、

「レイ」

フィラがオレに声をかけてくる。

「私がフィーナを見ているからレイは王都の確認をお願い。後、頭を少し冷やしてきなさい」

「フィラまで」

「今のレイはいつもの冷製さがない。だから、ちょっとでも落ち着くために、お願い」

オレは天井を見上げた。見上げて、自分がどれだけ無力なのかを改めて実感してしまう。

自分にもっと力があれば良かったのに。もっと、力があれば。

「わかった」

オレはただその言葉を口にするしか出来なかった。

「ガイウス、悪い」

「礼には及ばない。だが、今の話が本当だとして、どうやって助けに行く？」

ガイウスが王都を親指で指差しながら尋ねてきた。確かに、王都は

魔物で埋め尽くされている。そこに突入するということは魔物の中に突入すること。

助けに行けるような状況でもない。戦術的に考えたら見捨てるという回答になるだろう。

「助けに行くにしても誰が行くになるが、それはギルバート達か」

「そうだね。僕達は三つのパーティーに分けて行動していたんだ。一直線に王都を目指した慧海達と調べ物をしながら王都に向かっていた僕達とテオロ達。テオロ達には連絡を取ったから合流してから王都に潜入になるのかな」

「そこまでして王都に何の価値がある？　王都は確かに一番大きな都市だが、それほどの価値は見いだせないぞ」

ガイウスの言葉は最もだ。

王都は大きいだけで他の面から見ればそれほどすごい都市ではない。学問に関しては学術都市があるし、戦闘能力ならこの要塞都市がある。

だから、王都を目指していた理由がいまいちわからない。

「そうだね。今の状況だから君達に話していても損はないか。僕達は魔物の大量発生について調べている。いや、大量発生というより軍隊となって行動している理由というべきかな」

そう言いながらギルバートは王都にいる魔物を見た。

「本来は別個体と共に集団行動を取るはずのない魔物が今では軍隊を作り出している。それにはさすがに興味が湧いてね。被害の現状を知るために僕は魔物についての話をクロハと共に聞き回っていた。メリルとはその道中で会ったけどね。慧海は直接王都に向かい、テオロ達は学術都市レンバシアを経由して王都に。最終集合地点は王都になるはずだったんだけど」

「その王都が今では魔物の住処というわけか。ギルバートの行動について行きたいのは山々だが、父上や母上が心配するのでな、俺は要塞都市にいる。レイ、お前は違うのだろ？」

ガイウスの言葉にオレは頷いた。

王都ではまだ戦っている。戦っているのに見捨てられるわけがない。

「無駄死にはするなよ」

そして、ガイウスはそのままオレ達に背中を向けて歩き出した。

多分、照れ隠し。

「レイ、君は僕と同調しなくてもいいんだよ。これは危険な任務だ」

「危険だとしても、王都に生き残っている人がいるなら助けに行くべきだ。オレはそう思っている」

「その話、詳しくお聞かせ願いませんか？」

「クリス」

その声にオレはクリスの名前を呼んだ。クリスは杖を背中に担いでいつの間にかオレの隣に立っていたからだ。

ギルバートが驚いているところを見るとどうやらギルバートにすらわからなかったらしい。

「王都にまだ、生き残りがいるのですね？」

「ギルバートの仲間が戦っている。もしかしたら、他に生き残っている人がいるかもしれない」

「でしたら、私も救出部隊に参加させてください。もしかしたら、お父様が残っているかもしれません」

「国王陛下が？　レクス王子は国王陛下が亡くなられたと」

「生死は不明です」

クリスは視線を落とした。多分、クリスにも分かっている。生存が絶望的であるということを。

だけど、一縷の望みにかけているのだ。

オレはギルバートの顔を見た。だが、ギルバートは首を横に振る。

「クリスティナ王女。あなたはこの要塞都市の責任者だと聞いています。そんなあなたが自分の責務を放って」

「任命したのはレクスお兄様です。国王の証である拝礼の杖を持って来るように命じたのもレクスお兄様です。近衛騎士団の大多数と

共に逃げた。そんな人の命令を聞くならば私は王女という地位を捨ててでもお父様を助けに行きます」

「駄目だ。君はまだわかっていない。国王というものが、次の王の意味を」

「王の意味？」

ギルバートはそっとクリスの肩に手を置いた。

「王は国を守る。国は民を守る。民は国を作る。国は王によって存在する。王が王となりえない存在ならば、その時は新たな王を立てなければならない。王は国があるからこそ存在し、国は民がいるからこそ存在する。だから、クリスティナ王女は要塞都市グラザムで待機していてください。僕達が必ず、生き残った全員を連れて」

「つまりは、クリスティナ王女自体が死んだらこの国は終わりだ、っていうことよね？」

その言葉と共にフィラが城壁の上へと登ってくる。フィラの腰には１０にも及ぶナイフが吊されていた。

「だったら、クリスティナ王女を守ればいい。違うかしら？」

「簡単には言うけど、どうやってクリスティナ王女を守りながら向かうのか説明してもらいたいね。そんなことは不可能だよ」

「可能です」

その言葉を返したのはクリスだった。

「私なら、王都にあるいくつかの隠し通路を知っています。そこを使えば見つからずに王都に入ることは可能です」

「しかし、王都に入ったとしても、それからが」

「ギルらしくない。ギルの力なら守れるでしょ。私もクリスティナ王女もみんなも、自分自身も」

「クロハ」

クロハ・H・ルーンバイト。

ギルバートの第一王妃で剣技の達人らしい。ちなみに、このことはギルバート達と合流してから知っている。

クロハは城壁の上に立ち王都を見つめる。

「ルーンバイト城よりも広くて入り組んでいる。ギルは戦い方をもう決めているのでしょ？」

クロハの言葉にギルバートは軽く肩をすくめた。

「仕方ない。わかった。ただし、連れて行くのは三人まで。怪我をすれば見捨てて行く。覚悟が出来れば日が沈んだ時にここに集合。その後にクリスティナ王女から聞いた隠し通路に移動する」

第十九話　準備（前書き）

若干燃え尽きています。昨日に予約投稿で一気に上げた作品のせいなんですけどね。

第十九話　準備

清潔な部屋。

どんな医務室でもこういう場所なのだとわかっている。だから、オレにとってはあまり好きではない空間でもある。

清潔なカーテンに仕切られた空間にある清潔なベットの上にはフィーナが眠っていた。静かにフィーナは眠っている。

一時は意識を失い危険な状態だった。医師の話では一生目を覚まさない可能性も低くはないそうだ。そもそも、生きているのが不思議なくらいの怪我。

そんなフィーナの近くには鞘に収められたオリジンがある。オリジンは鞘から抜いた状態で持てばフィーナとオレ以外を凍らせる。一撃で絶命させる。

オレはオリジンに手を伸ばした。

そして、代わりに必死に作ってもらった剣を置く。

「フィーナはゆっくりしていてね。オレは、今から王都に」

「レ、イ」

その声にオレは振り向いた。そこにはうっすらと目を開けたフィーナの姿がある。オレはすかさずフィーナに駆け寄った。

「起きた？」

「良かった。レイが、無事で」

安心したようにフィーナが息を吐く。そして、オレを見てくる。

「戦いに、行くの？」

「うん。オリジンを借りるから」

「だめ。オリジンは」

フィーナが起き上がろうとする。だけど、オレは肩を押さえて起き上がらないようにベットに優しく押さえつけた。

フィーナが驚いてオレを見ている。

「フィーナはゆっくり休んで。フィーナがオリジンを他人に使わすことに抵抗があるのは知っている。でも、今はその力が必要だから」

「レイは弱いから」

「今はフィーナの方が弱いよ」

クリスによって治療されたものの、内臓破裂に全身複雑骨折等々の怪我を負っていた今のフィーナの体力はほとんど底をついているはずだ。

だから、オレはフィーナに笑いかける。

「また、旅をする時に守ってくれればそれでいい。だから、フィーナの大事なオリジンを借りるね」

「うん。わかった。悔しいな。守りたい人がいるから強くなったのに、レイに守られるなんて」

「オレだって守りたい人を守れる強さが欲しいから強くなった。確かに、オレの体には欠陥があるけど、そんなことは関係ない。守りたいという意志と仲間がいれば、何だって出来るから」

「そうだよね。レイ、頑張ってね。私は、ゆっくり休むから」

「ああ」

オレはオリジンを軽く上げて歩き出した。

オリジンはフィーナの思い。この思いを持つということは必ずフィーナに返さないといけない。

オリジンの強さは桁が違う。だから、守らないと。守りきらないと駄目だ。この命に代えても。

医務室から出て小さく息を吐き、気づく。クリスが医務室の近くの壁に背中を預けているのを。

「フィーナはどうでした？」

「目が覚めたよ」

オレはオリジンを腰に差しながら答える。

「だけど、戦える状況じゃない」

「それはわかっています。私が治療しましたから。生きているのが不思議なくらいの大怪我を治せたのは、おそらくそのオリジンの力だと思います。普通なら、出血多量で死んでいますから」

「そうなんだ」

「はい。だから、悔しいんです。力がありながら、私はフィーナを助けることが出来なかった。もし、オリジンをフィーナが持っていなければ、フィーナは死んでいた。そのことを考えるととてつもなく怖いのです。もし、レイが怪我をしたなら」

「治癒出来ない以上、オレは死ぬ」

治癒魔術の効かない体というのは戦場に身を置くにはあまりに酷すぎる。だけど、オレはクリスに向かって笑みを浮かべる。

「クリスでも不安になるんだな」

その言葉にクリスは勢いよく何かを言おうとして、だけど、言葉が出ずに口は開いたままになる。そして、俯いた。

クリスが何を言いたかったのは何となくわかる。おそらく、何を呑気なとでも言おうとしたのだろう。でも、オレのことを考えたら何も言えないのだ。

オレにクリス以上に力はない。そんなことはわかっている。わかっているからクリスは何も言えない。

戦う意志を見せていたとしても。

「どうして、レイはそこまで出せるのですか？　私には、そんなこと」

「いいんじゃないか。それが違いというものだから」

怖いというわけじゃない。でも、みんながいるなら戦える。オレはただ、そう思っているだけだから。

フィーナからオリジンを借りたのはあくまで御守りのため。剣を置いていったのはもしもの時のための武器としてもらうため。

だから、オレは生きて帰らないといけない。

「オレだけじゃないんだ。クリスやフィラもいるんだろ？　だったら、オレ達は負けない。フィラの強さは知っている。クリスの強さも知っている。だから、負けるわけがないんだ」

「でも、相手はあの魔物の群れです。いくら私達が強くても、あの数には」

「対応出来ないわけじゃない」

その言葉にオレ達は振り向いた。そこには漆黒のプレートアーマーに身を包んだクロハの姿があった。クロハの腰には純白の刀が差されている。

クロハは窓の外から魔物に埋め尽くされた王都を見る。

「今回の作戦概要は王都にいるある仲間を動ける状態にするだけ。それが出来たなら状況は一変出来る」

「失礼ですが、そのような戦力がいるならば、今頃王都から逃げ出すことは」

「彼は、絶対に人を見捨てない」

クロハの言葉には経験が混じっていた。そして、それは事実なのだと言っている。

「相手が魔物の群れでも、魔獣の群れでも、軍隊でも、守るべき人達を守るためなら地位も名誉も捨てて戦うから。戦略的に言えば見捨てた方がいいとしても、彼は必ず、みんなを連れて生還する。それが彼のすること」

「つまり、王都で戦っている人達の所まで駆けつけて、避難民を守る。そうすれば、魔物を全滅出来る人が動き出す、で、いいよね？」

「そう」

クロハは頷いた。その顔にはクロハが信頼しているという色が強く出ていた。おそらく、ギルバートも信頼しているのだろう。だったら、一度会ってみたいものだ。

でも、その作戦ならかなりの危険性が省ける。最も、その人物がクロハの言うような強さを持っていればだけど。

でも、ギルバートやクロハはオレ達よりもはるかに強いから、強さ

だけなら十二分に大丈夫に違いない。後はどうやって突破するかどうか。

オレはオリジンを握り締める。フィーナから借りた力。本当なら使えないはずの力。だけど、オレはこれを使わさせてもらう。

そう言えば、要塞都市前での戦いで戦っていた時に聞こえたあの声は何だったんだろうな。

「レイ、どうかしましたか？」

「えっ？」

「とても怖い顔をしていましたので」

オレは自分の頬に手を当てた。全く自覚はない。自覚はないけれど、多分、怖い顔をしていたのだろう。

あの声の事を考えていたら。

「わからない。でも、王都に行けばその理由がわかるかもしれない」

クリスとクロハの二人が不思議そうに首を傾げる。当たり前だ。オレの言ったことは意味がわからないだろうから。でも、オレは言った言葉は訂正しない。

おそらく、それは直感。あそこには何かがあるのだから。

「ともかく、今は王都に入り込むことを考えないと。あそこで戦っている人は何日も戦えないよね？」

「後三日は大丈夫だと思う」

つまり、後三日以内に目と鼻の先にある王都の中に入って助け出さないといけない。正面衝突すればかなりの被害が出るだろうけど。

オレは小さく息を吐いた。吐いて、今でも戦っている場所を見つける。

「必ず、行くから」

その口から漏れた言葉はあっという間に虚空に溶けていった。

第二十話　王都侵入作戦（前書き）

地味に神剣について語っています。

第二十話　王都侵入作戦

「王都からの隠し通路は実に２３種類存在しています。ですが、基本的にはそのほとんどが周囲につながっている道で、とある隠し通路を除いて全てが王都だけ孤立した場合は想定していません。もちろん、王都だけが占領された場合も」

ギルバートを先頭にオレ達はクリスの案内で要塞都市から王都につながる隠し通路を通っていた。

先頭をギルバート。次に、クリス、オレ、フィラ、クロハの順でもある。

「一つだけはなにか国の大事なものを隠している場所につながっているんだね」

「はい。それは国王のみ継承されるもので、それは国王の証では無いものだと聞いています。お父様からは私には教えることはないだろうと言っていましたが」

「まあ、クリスの王位継承権を考えたら妥当だよね」

オレはそう答えながら周囲を見渡す。ちょうど人が二人ほど横並びで通れるくらいの大きさ。だから、オレ達は一列になって歩いている。

そんな隠し通路があるなら一度は行ってみたけど、それはしない方が無難かもしれない。というか、見つかったら確実に処刑になるような。

「なるほど。大体は予想出来るよ」

だけど、ギルバートは何があるかはなんとなく把握しているらしい。

「国にとって象徴となるのは基本的に神から授かったものであるのが普通だからね。おそらく、この国には魔法を越えた力を発揮できるもの、つまりは僕の持つラファルトフェザーや今はレイが持つオリジンのようなものと同じ存在か、金銀財宝のどちらか」

「確かに、あなた方の武器はかなり特殊なものですね。神剣とは一体何ですか？　私達が知るような伝承にある神剣とは少し、いえ、かなり違うものであると私は思っています。フィーナは言葉を濁していましたが、あなたなら答えてくれるだろうと思っていますので」

「そうだね。出来るだけ言いふらさないと確約してくれるなら僕は語るよ。どうだい？」

オレはその言葉に頷いた。クリスも頷いている。おそらく、フィラも頷いているだろう。

「そうだね。まずは神剣が生まれた経緯から。神剣はそもそも強大な力を持った神が神によって砕かれた時に人々に配られた力の破片が力となった姿なんだよ」

「人々に配られた力の破片？　じゃあ、破片でありながらギルバートの刀やオリジンはそんな力を持っているのなら、神はどんな力を」

「先に言っておくけど、僕の神剣とフィーナのオリジンは少し産まれた経緯が違う。基本的には神剣はここまで強力じゃない。限定的

な能力特化したものが基本だ。その中で一番有名なのはスターゲイザーかな」

「星を見る人？」

クリスが不思議そうに首をかしげる。確か、古代の言葉でスターゲイザーとは星を見る人と訳されたはずだ。スターゲイザーというのは別に意味を持っていて星の記憶を知る星語りに贈られる名前だとも聞いている。そんな名前がどうしてギルバートの口から。

すると、ギルバートは驚いたように振り向いていた。

「スターゲイザーを知っているのかい？」

「はい。この国を作った始祖はスターゲイザーと呼ばれていましたから」

「なるほど。いや、今はいいか。話を戻すよ。スターゲイザーという神剣はとある重い病に侵された少女が星を見たいと言う願いから生まれた神剣なんだ」

「ちょっと待った」

フィラが声を上げる。フィラが上げていなかったらおそらくオレかクリスのどちらかが上げていただろう。それほどまでに自然と言われた。

「どういうこと？　あなたは力の断片と言っていたけど、それはまるで望みを曲解して生まれた神剣ということ？」

「そうだよ。神の力を配った神々はそのことに恐怖したらしい。元々は神の力を分散させることで僕達人間に影響を与える神を排除する目的だったのに、その力によって人は神に対抗する力を得てしまった。その中でもスターゲイザーは破格の能力を持っていた。それこそ、神が畏怖するほどに」

「一体、どんな力を」

フィラが息を呑む。神が畏怖するほどの能力というのは一体どのようなものだろうか。

「星の光を呼び出す能力だよ」

「どういうこと？」

フィラの言葉で弛緩していた空気が緩くなったような気がした。緊張感は張り詰めているけど。

「その言葉通りの意味だよ。光を呼び出す。そして、相手にぶつける。シンプルな能力なんだけど、そもそも、神が星に勝てるわけがないんだよ。だから、神は畏怖した。神剣というものに。そもそも、神はすでに別の神剣に畏怖していたけどね」

「それがオリジン等なのですね」

クリスの言葉にギルバートは頷いた。

「原初神剣。世界に五本しか存在していない。それを知るものは極めて少ない。そして、その全てを知る者は今ではおそらく僕一人だろう。それほどまでに神にまで畏怖された神剣なのだよ」

「ギルバート。それを知るお前はなんなんだ？　まるで、神とでも言うかのような発言なんだけど」

オレの言葉にギルバートが振り返って、そして、頷いた。

「そうとも言えるね。それが僕の神剣の力だから。さて、そろそろだね」

ギルバートが鞘から黒い刀を抜く。

「この刀、ラファルトフェザーとクロハの刀、シュナイトフェザーは二つで一つ。それが一つになった時、原初神剣を除く中で二番目に強い神剣が出来上がる。だから、僕は本当ならこう名乗らないといけない存在なんだ」

ギルバートが目の前に現れた壁に対してその手に持つラファルトフェザーを振り抜いた。ラファルトフェザーは壁を砕き、その先にいた魔物の一体、大きい豚であるピグマを斬り裂いていた。

そのままギルバートが通路に跳び出し周囲を確認する。そして、小さく息を吐いて振り返った。

「『伝承の担い手』。それが僕に与えられた神証だ。さて、ここからは土地勘のある君達が」

「やはりここから君達が来たか。隙間風があるから来るとは思っていたけど」

その言葉が通路に跳び出したオレ達の耳に入った。振り向いた先に

いるのは笑みを浮かべている統率固体の少年。

いきなり敵の大将と当たるとか僕達はどれだけ不運なのだろうか。

「分身だね」

ギルバートがラファルトフェザーを構えながら少年に言う。少年は軽く肩をすくめた。

「君には僕の力が知られているのだったね。なら、仕方ない。そうだよ。僕は本体じゃない。力もかなり落ちているから、君には太刀打ちできない。でも、ここに魔物を呼んだ。ここからなら君達が通ってきた道を使って侵攻出来るんじゃないかな？」

「そうですね」

クリスが笑みを浮かべながら杖を構える。そして、一瞬で魔法を放っていた。

最も初歩の初歩魔法であるマジックアロー。その威力は人の張り手ほどの力しかない。だから、案の定、少年はマジックアローを避けた。

「そんな攻撃じゃ当たらないよ」

「皆さん、走ってください！」

その言葉に真っ先に反応したのがギルバートだった。そして、オレ達も走り出す。クリスは一番最後。

「物質の記憶１１０！　我が求めに応じ、壁と成せ！！」

クリスが使える最大級の魔法の一つが出来上がった。周囲の壁が鳴動し、クリスと少年を塞ぐように壁を作り出す。一瞬だけ止まったクリスの体を僕は抱えて駆けだした。

今のクリスは軽装甲なので少しの間なら抱えて走ることが出来る。

「ありがとうございます」

その言葉と共にオレはクリスを下ろす。

「クリスは一体何を」

「そうですね。例えば、隠し通路が見つかった場合、又は、隠し通路から逃げてきた場合、そこから侵入されない、又は、追手から逃げるためにはどうしたらいいと思いますか？」

その言葉にオレは首をかしげた。ギルバートは先頭でクロハと一緒にラファルトフェザーとシュナイトフェザーをお互いに振って道を作り出している。

その姿は必死。いや、切羽詰まった表情だ。つまりは、

「通路を破壊する？」

「はい。マジックアローで押したスイッチはこの通路を崩落させるスイッチです」

そう、満面の表情で言われた。それと同時に背後から何かが崩れる

音がだんだん近づいてくる。

「それってマジでありえないんだけど！！！」

フィラの叫びが響きわたる。それに関してはフィラに本気で賛成しよう。というか、オレ達生き残れるのか？

「階段だ！」

ギルバートがその言葉と共に横に曲がる。オレ達も続いて道を曲がって階段に突入した。

「ちなみに、階段も崩れるようになっているので」

「気楽な表情で言わないで！！」

また、フィラの言葉が響き渡る。

もしかしたら、エンシェントドラゴンと戦うよりも悲惨な状況かもしれない。だから、オレは全力で走る。生き残るために。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2581t/

ディバインナイツ　～星語りの物語～

2011年12月23日23時55分発行